



# 統

財團統  
一團發行

## 次 目

法華經の信解(共五)……………日生上人	億兆一心の秋……………井上清純
歴史の肯定と超歴史的立場(其二)……………河合陟明	落穂籠……………上田辰卯
恐怖政治下の印度……………ラス、ビハリ、ボース	社会と宗教……………日暮光道
記事……………	

○本團月報  
○寄附團費誌料領收

○見聞録

○編輯室より

第三十七年十月號

吉田猪七郎殿	上田たけ殿
吉田徳太郎殿	久保田仁三殿
橋本久殿	安田喜十郎殿
高瀬恒次郎殿	藤原淺吉殿
中山喜八殿	松本榮子殿
長瀬亀吉殿	三島さく殿
長治クミ殿	三原六松殿
長澤鐵二殿	三好國壽殿
中藤ミトヨ殿	三島平吉殿
中村常八殿	島田すが子殿
中村銀藏殿	土方みづ殿

### 松尾清明著

### 新刊 國體本源論

（御注文の簡便爲の）  
（雑誌名記入を乞ふ）  
定價金三十五銭  
郵税不  
要

△郵券代用お断り。振替口座御利用あれ  
自己の愛住せる大地の體格を克明に認識せずんば他の何事をも誤解するに至るべし。日本人たるもの先以て日本の國體を正解するを要す。此意味に於て本書をすゝむ。

千葉縣長生郡二宮本郷村

東天社

振替口座東京三三三三三三番

價定一統		
一冊	半冊	一冊
金貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢
送料五厘	送料五厘	送料五厘
前金之	前金之	前金之

料告廣一統		
表紙一頁	一頁	一頁
金貳拾錢	金拾錢	金九錢
前金之	前金之	前金之

昭和七年八月廿四日印刷納本  
昭和七年九月一日發行  
（第四百五十號）

不許複製

編輯兼 發行所  
印刷所  
東京府在厚郡品川町南品川四百十二番地  
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團  
振替東京九四二〇番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

## 精神文化と教化の大本

無限の欲望を有せる人類が、有限の物質を以て文明を誇らんとしても遂に不能であつたと、今度は物質から精神へと轉換して何でも精神文化だ、心靈生活だと騒ぎ廻るに到つた。

『模倣は進化の一階段だ』と歐米心酔に日も惟れ足らざりし人等も、今日は一步踏み止まつて己が脚下を照顧せざるを得なくなつた。其時に計らずもあるものを見出して勇躍歡喜した。實に金鏡は吾等の掌中にあつたのである。

先年、生活改善と教化總動員が朝野に唱え出されて恰かも燎原の火の如く全國に燃え擴がつたけれ共、其結果はどうであつたらうか。

今回は齋藤老首相が思ひ切つて日比谷の原頭に國民の奮起を促すべく非常時克服の悲壯な獅子吼を肯てするに到つた、吾人は大に襟を正うして深厚なる敬意を拂ふ。一部の國民があまりに信頼心が募つてゐるから、そこで『國家の負擔は國民の負擔である』と三十棒を喰はされた。いまはしい他力本願の普及せる惡果である、更に獨善的に海外預金を割する者、法網を潜らんと腐心せる者等々已に七百年前、日蓮聖人に依つて呵責せられてゐるではないか。『政を正しくするの本是學問にあり、學問の本是これ儒、釋、神なり』とは爲政家の牢記すべきである。教化の大本が明かならずして花火線香式に終るは遺憾極りない。

謂ふ、最高至善なる一大徳教を人々に與ふることが刻下の最大急務であることを。

## 法華經の信解 (其五)

### 目次

#### 四、法華經の位置

#### 四、法華經の位置

日生上人

次に法華經の位置といふことを考へて置きたい、それは直接は佛教の中に於ての位置であるが、廣く言へば人類文化の中に於ける法華經の位置といふことである。

佛教の中に於て法華經の位置は、方便品を始め、藥王菩薩品に至るまで、この法華經の位置といふことに關して非常に詳しくお説きになつて居る。方便品に依れば、法華經に來るまで四十餘年の間いろいろの方便を用ひたけれども、この法華經は『正直に方便を捨て、但だ無上道を説く』と言つて、この上も無き尊き道だといふことを證明されて居る教である。さうして法師品に至つては、佛は澤山の教を説いた、已今當の三説と言つて、已に説き、今説き、當に説かん、この前後四十餘年の長き説教の中に於て、法華最第一である、一切經の中に於て法華經は最も勝れて居る。三説超過と言つて、已に法華經に來るまでの間に説いた、一切の教の中にも、今法華經と同時に説く教の中にも、これから後當に説かんとするところの教の中にも、この已今當の一代三説の中に於て法華最第一なりといふことを、明瞭に法

師品に於ては説かれて居るのである。これを三説超過の妙典と申して居る。

それはどういふ點に於てかと言へば、法華經は開顯の思想と申して、一切の教を疏通してさうして佛法を統一するものである。法華經を信解するといふことは、この小さい一つのお經を信解するのではなく、佛敎全體の思想を信解することである。信解品に於て法華經に關する信解を述べて居る所を見れば、初め佛が華嚴の教を説かれた時も、次いで阿含の教を興へられた所も、一代五十年の説法の事柄を、彼の迷うた子供に譬喩に寄せて、さうして釋尊の大化導を信解したのが、法華經信解品の起る所以である。法華經の信解といふものは、たゞ法華經だけを信解するのではない、釋迦一代の事を信解し、進んで壽量品を通して後に起る分別功德品の一念信解となれば、釋尊の五百塵點劫來始め無く終り無く盡十方に大活動をなされる、眞の絕對の佛を信解するといふことになるのである。即ち法華の信解とは、釋尊一代の化導を信解し、更に絕對本佛の絕對の活動を信解するといふことにならぬ。即ち法華の信解である。たゞこのお經が有難い、錦の袋に入れて拜んで居る……さういふものではない。そこで法華經の位置は、今申す通り一切經の中に於て第一である、これを藥王品に於ては十喻稱歎と申して、十の喩を擧げて法華經の卓越を示された。それは經文に明瞭なるが如く、一讀すれば誰にもわかる。

「譬へば一切の川流江河の諸水の中に、海是れ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し、諸の

如來の所説の經の中に於いて最も是れ深大なり。」

最初の譬は海の譬であるが、一切の水の中に於て海が一番大きく深いやうに、法華經は總ての教の中に於て最も大きく深いものである。

又土山、黒山、小鐵圍山、大鐵圍山及び十寶山の衆山の中に、須彌山爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し、諸經の中に於て最も爲れ其の上なり。

次は山の譬で、須彌山が一切の山の中に於て一番大きな山であるが如く、法華經もその通りである。又衆星の中に月天子最も爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し、千萬億種の諸經法の中に於て最も爲れ照明なり。

次は月の譬で、澤山の星の中に月の光が最も圓滿であるが如く、法華經もその通りである。又日天子の能く諸の闇を除くが如く、此經も亦復是の如し、能く一切不善の闇を破る。

これは日に譬へて、總ての闇を除く方の中に於て、日の光が一番勝れて居るが如く、人の心の闇を除く教の中に法華經は第一である。

佛爲れ諸法の王なるが如く、此の經も亦復是の如し、諸經の中の王なり。

これは王様に譬へて、澤山の王様があるけれども轉輪聖王が一番理想的であるが如く、法華經も諸經の中の王様である。斯様にズツと十の喩が擧つて居るのであつて、この十喻稱歎の經文を見れば、誰でも

法華經が佛教中の一番勝れたお経であるといふことが能くわかるやうになつて居る。講釋を聽かなくて  
もわかるでせう、一切の水の中に於て海が一番大きいやうに、法華經もその通りであるといふのである  
から、誰にでもわかる。傳教大師はこれに依つて、『深きことは蒼海の如く、高きことは須彌の如く、  
明かなることは日輪の如く、圓かなることは盈月の如し』と賞揚せられた。法華經が一切經の中に於て  
勝れて居るといふことは、光の中に於て日の光が明かであるが如しといふので、ナニもこれは自讃毀他  
といふ、自分の方を讃めて他を毀るといふやうな卑しい感情から言ふのではない、法の道理然らしむる  
のみ。法華經が勝れて居るか勝れて居らぬかなどと議論するのは、お日様が明るいから明かといふこと  
に喧嘩をするのと同じ事である。であるから本當の考のある人は、法華經が勝れて居るといふことに  
反對は出来まい、『有智の君子良爾せよ』本當の智慧の有る偉い人は、佛教中に法華經が卓越して居る  
といふことは直に承服しなければならぬといふことを、傳教大師は書かれて居るのである。

さういふことは佛教の中に於てあまり澤山の議論を要しない所であるが、更にこれが進んで人類文化  
の中に、法華經がどういふ位置を占めるかといふと、大體宗教は前に申すやうに、哲學と相並んで文化  
の高等なる方面を形づくるものである。であるから人類の有つて居る文化の中に於て、學問といふもの  
も廣大なものであり、又發明も廣大な價値を有するものであるが、併しその中に於て、哲學宗教を開創  
した偉人といふものは、特に偉い人であると言はなければならぬ。ところが世界に澤山宗教があるとい

ふのであるが、西洋で先づ大きなものは基督教である、マホメット教があると言ふけれども、これは基  
督教の焼直しみたいなもので、先づ基督教一つである、それが舊教であるとか新教であるとか言つて、  
僅かな相違をゴタ／＼言つて居るが、吾々から見れば一つの基督教である。それから東洋に於ては印度  
の婆羅門教、これが先づ世界に於て有数の宗教である。けれどもこれ等の宗教は、何れも造物主といふ  
ものを立てた宗教であつて、婆羅門教は摩醯首羅天に依つて世界が造られたと言ひ、基督教はエホバの  
神に依つて世界が造られたと説くのである。ところが哲學上から進むところの知識は、左様な一人の神  
が、何も無い所から世界を造るの、人を造るのといふやうな、無から有を生ずるといふことは絶対に認  
めないものである。何にも無い所から物が出て來たといふやうなお化みたいなことを言ふのは、それが一  
番論理に合はぬといふことの證據である、非眞理といふことはそれナンである。何も無い所から物を造  
つたといふやうなことが許されるならば、眞理の研究、人間の知識といふものは無いのである。

その意味に於て、世界に澤山の宗教があるやうだけれども、そんな哲學の知識と正面衝突をするやう  
な宗教は、將來如何に焼直し捏廻しても眞の勢力は得られない。いろ／＼の事情から信心をしたやうな  
形だけして居る、『マア／＼信心をさして置いたら、女房も嫉妬をやかないで宜からう』『亭主も信心  
して居るやうな者は酒を飲まないで宜からう』といふやうなところから、何か便宜的に、マア／＼宗教  
をやつて置いたら宜からうと言つて居るけれども、本當に人が知識に覺醒した時、根本の哲學的眞理に反

對するやうなさういふ宗教が、將來認めらるべきものではない。「神様が世界を造つたといふことにし置くけれども、併しそれは嘘ナンだ、嘘だけれどもまあ掌を合せて置いた方が宜からう」……そんな間に合せなことで眞の宗教の力が出て来るものではない。知識も信仰も相協力して行かなければならぬ、この信智一體といふことが佛教の立場である。

その點に於て獨り佛教は人類文化の最高なる哲學宗教の一番善い所を占めて居る。西洋の哲學のやうに理窟ばかり言つて、信仰にまで來らずしてまご／＼して懷疑的になつたり、冷かになつたりするといふやうなことは、哲學としての失敗である。程良い所で哲學は宗教に信仰の材料を提供しなければ、哲學は無用の學となり、却つて人類を毒することになる。宗教が又いつ迄もお伽噺みたやうなことで信仰を繋ぐとすれば、知識と衝突するが爲に、いつ迄も宗教信すべきか信すべからざるかといふやうな論争を捲起して、厄介で仕様がなない。早く人類文化の大掃除の爲に、哲學はモツと正確な眞理を抑へて宗教の信仰に進み、宗教はお伽噺のやうな獨斷を捨て、哲學の眞理と一致すべく、健實なる基礎に立たなければならぬ。それが人類の文明を大成する上に於て、先づ大黒柱の仕事である、文化の中心事業である。哲學宗教の一致、知識と信仰の一致といふことがなければ、いつ迄も混疑土の建物は出來ずにバラツクで置くやうなもので、又地震があれば潰れ、火事が起れば焼けたといふことになつて何にもならぬ。

であるから二十世紀の最高の人類の事業といふものは、この高いところの哲學と宗教、知識と信仰を一致せしめて、茲に健實なる混疑土の建設をして進まなければならぬ。そこに佛教といふものゝ任務が獨り最も重いことがわかるのである。

その場合に、佛教の中に於ても知識に偏して信仰を得なかつた禪學のやうな、徒に理窟のみ多くして掌を合せることがわからぬやうなものは、これは將來の宗教とは成り得ない。又淨土門一流の如くたゞお有難主義で、知識の側に盲目になつて居るのも、折角偉大な佛教を應用する上に於てはつまらぬ行き方である。獨り法華經は、諸法實相の哲學の側と、本佛顯本の宗教の側とが洵に能く整頓して教へられた點に於て。二十世紀の大事業を完成せんとする。知識と信仰の一致を教へる世界最大の光が、法華經の中より發射して日本乃至一閻浮提に廣宣流布するものであると信するのである。

さういふ意味から言ふと、人類の文化の中に最高の地位を占むるものは法華經である。先づ内にして日本人の全部が、法華經に對して一心に合掌禮拜して南無妙法蓮華經と唱へ、往いては全世界の人類が一天四海皆歸妙法の春を迎へて、一切の人類共々に南無妙法蓮華經と唱ふべき日は必ず來るであらうと思ふ。願くばその廣宣流布の春を迎ふべく、それに貢獻する努力として吾々は日夜働いて行くのである。日本の國もその時始めて六合照臨の聖徳が現れ、「日は東より出で、西を照す」といふ日本の國號も、この法華經の光と結んで始めて人類の光になるといふのが、日蓮聖人の法國冥合を叫ばれた御趣意

である。これは如何にも適切なる主張であつて、たゞ國々と言ふと、徒に權力を振廻すやうになる、その上から法華經のやうな温かな光が現れて、その法の尊さと共に日本の國が渴仰されるといふ日蓮聖人の御趣旨の如きは、洵に深い思召のあることと思ふのである。

これより進んで法華經の内容に入つてその本質を御紹介し、更に法華經の實行に關して申述べたいと思ふのであるが、それは項を更めてお話ししようと思ふ。

# 億兆一心の秋

男爵 井上 清 純

一、清明心  
本年本月は關東大震災第十周年忌に相當する上に滿洲事變勃發以來正に一年を閲し寔に思出深い月であります。古來我國人は幾多の難關に遭遇して居りますが、未だ曾て之が爲に國民の意氣の沮喪した例を聞かない、一難を経た毎に勇氣新に倍加するを見るのであります。

「難は多かれ運は強かれ」とは清正公の壯時神明に祈願したる言葉であります、我國に於ては國難の後大躍進が伴ふを常として居る。竟畢天變地異一切の災禍を以て自己反省の資となし、國民的覺醒運動が起るからである。安政の地震の際「立て直し」と言ふ言葉が流行つた、世直しの意味で、過去の我を清算して新なる生活への勇しき進軍喇叭である。

當時吾々の祖先は死者に對する追善回向を第一に行つた。地震は十一月三日に起つたのであるが、翌年の三月になると直ぐ神社の祭典を執行した、御輿は皆焼けてしまつたから、市民は神の大きな神輿を擔ぎ出して華々しい快活なお祭をしたと云ふ事である。關東大震災の日の夕暮、佛蘭西の一宣教師が九段坂の上に佇立して、下町の火の海から逃れて坂を登つて來る幾萬の罹災民を悲痛な心持で眺めて居た數年の後其當時の光景を思ひ起して、彼の宣教師は次のやうな言葉を漏らした。

「あの何萬と云ふ罹災民の群が、後から後から坂を上つて來るのを私は涙を流しながら眺めて居た、何と云ふ不幸な人々であらう、骨肉を失つたものも

夥しからう、一朝にして少からぬ富を灰燼にした者も數へ切れぬ程居るだらう、而も何と云ふ穏かな顔をした人の群だらう。之が若し歐米諸國に起つた天災であつたらどうだらう、嘆き叫び泣くは勿論、

必ず多くの發狂者の姿を見るに相違ない。然るに此國に於ては自分の目撃した罹災民の群の中からは、一人の發狂者を見出す事が出来なかつた、之は異常の發見であつた、日本人に取つて失ふと云ふ事はそれが生命であつても、財産であつても、要するに元に還る平かな道であるのか」と申して居る。然り我が國人には、個々は中心たる全一的の大生命に歸一する信仰を有して居るのである、三千年來我等大和民族は如何なる苦痛に際會しても此清々しき心境、快活なる氣持を以て押し通し進んで來た。世界第一の雄都大東京を灰燼の裡より築き上げたのも此清明心によつてである。

## 二、神國に對する感激

北畠親房卿が「大日本は神國なり、天祖始めて基を開き、日神永く統を垂れ給ふ我が國のみ此事あり、異國に其のたぐいなし」と、我が國體を喝破した神皇正統記開卷の文は、千古不磨の言にして誰しも能

く知つて居る所であるが、此神國なりと云ふ事を尤も國民に強く思ひ當らしめたのは今より六百五十年前、彼の蒙古襲來の大國難であつた、當時の戰士がよくも一身を君國に捧げ、再度に亘る凄絶壯絶の大襲撃に際し、大和心を遺憾なく發揮した華々しさに感激するものであるが、文永十一年の役には、蒙古の大軍が我國土を侵略せんとして博多に上陸し、我武士は必死になつて雲霞の如き大軍を迎ひ撃つたが、頗る苦戦の後一時太宰府の附近まで引き上げざるを得なかつた。敗報に全國民は色をなし戦慄したが、その夜偶々彼の大神風が起つて蒙古の軍船は木葉微塵と碎け散つてしまつた。然るに蒙古は、弘安四年に、更に大規模に我國に侵寇して來た、大船隊が二手に分かれて、北九州に發到して來た、之が爲に全士は再び震撼したのである。畏れ多くも後宇多天皇が、勅使を伊勢大廟に遣はされ御身を以て國難に代らん事を祈り給ひし御事蹟は、申すに感激に

堪へない。之が現實となつて弘安四年七月の晦日の夜から閏七月一日の朝にかけて、大暴風雨が九州の北海岸を吹きまくつた、十四萬の蒙古軍がその戦艦の大部分を失ひ、生きて還るもの五分の一にも足りなかつたと云ふに至つて文永の役以上に、神國として伊勢大廟を始め奉り八百萬神の威力の大なるを國民に感知せしめたものである。第二に國民的信仰を深からしめしものは、日露戦役に於ける皇軍海陸の連戦連捷である、就中日本海に於ける皇艦隊の大捷である。

三艦隊と日本海に戦ひて遂に殆ど之を撃滅することを得たり」云々と冒頭し結語として「此對戦に於ける敵の兵力我と大差あるにあらず、敵の將卒も亦其祖國のために極力奮闘したるを認む、然も我聯合艦隊が克く勝を制して前記の如き奇蹟を收め得たるものは、一に天皇陛下の御稜威の致す所にして固より人爲の能くすべきにあらず、殊に我軍の損失死傷の僅少なりしは歴代神靈の加護によるものと信仰するの外なく、奮に敵に對し勇進敢戦したる麾下將卒も皆此成果を見るに及んで唯々感激の極言ふ所を知らざるもの、如し」と、當年の事を思ひ起すと此通り誰一人自己の力だ等と考へたものなく、全軍の將兵皆廣大なる御稜威に打たれ、東方を伏し拜んで佐世保軍港に凱旋したのであります、此神國に對する感激こそ世界特異の大和心を生みなせし原動力であるのであります。

國民の信仰は、東郷長官の日本海々戦公報に明かに現はれて居る。五月廿七日の第一公報に曰く「敵艦見ゆとの警報に接し聯合艦隊は直に出動之を撃滅せん」とす、本日天氣晴朗なれど波高し」と、神明の加護を確信する事なくして此の大膽なる公報は出で來らぬ、既にして我が戦闘詳報には「天神と神助に因り我聯合艦隊は五月二十七日二十八日敵の第二第

三、大魔王軍來

然るに、此神國日本に大正十二年九月一日古來未曾有の大震災火災の大魔王軍が突如として襲來して來たのであります、而かも皇城の首府、皇國の頭腦を一瞬にして粉砕してしまつたのである。當時私は佐世保に居りまして千切れちぎれの飛電に、全く茫然自失し、一時祖國を失つた悲歎に陥りました。かゝる時萬一他國から攻められ、又は内亂でも起つたらば、我國はごうなつたであらうかと今尙膚に粟を生ずるのであります。

當時我國情はいかゞであつたかと云へば、確かに衰運の兆が歴然として現れて居つたのであります、之を民心の頹度に考ふるも、之を思想の惡化に考ふるも、或は政界の混亂に考ふるも、或は經濟界の不況に考ふるも、或は武力の整備に考ふるも、あらゆる方面から考察して、洵に情けない有様になつて居つたかと存するのである。その上申すも畏れ多き事ながら、大正天皇は永らく御不快に涉らせられた御

事は、國民としてこれ程悲歎すべき事はなかつた。翻て對外關係を顧れば、一層心肝を寒からしむるものがあつた、歴代内閣の因襲たる軟弱退嬰外交は、大勢順應、國際協調主義の外、何等の主義主張もなく爲に、歐洲大戰役直後の巴里平和會議に於て、列國環視の下に人種平等案の貫徹に惨敗して以來、華府會議に於ては英米の強迫に依つて、主力艦に於て必敗の劣勢比率を甘受せねばならぬ仕儀に立ち到り、青島は空しく支那に還附を餘儀なくし、日英同盟は廢棄せられ、九ヶ國條約の締結に依りて滿洲に於ける特權の喪失となり、之が爲め日本は、東洋の番犬又盟主たる位置を棄て、支那をして日本を輕視し、やがて侮日の態度に出づるに至らしめたものであつた。日露の交渉も難關に引き懸つて居たし、日米の關係は尙一層急迫を告げて居つた。

而かも之等一切の事象は一として日本の勃興を意味するものではなかつた、一步を誤れば國家が覆没

又々補助艦に迄必敗の六割比率を及ぼす事となつて、こゝ數年の中に太平洋の均衡は將に破れんとし居ります。かゝる英米に對する屈伏的態度は、支那の對日觀念に著しき變調を來らしめ、未だ何れの國に對しても敢て爲さざりし極端なる抗日、侮日、愚日の言行を露骨に仕向けて來た。而かも國內には、尙且支那の軟心を求めんとして滿洲放棄論すらも、識者の間に論ぜらるゝに到つた。かゝる際突如九月十八日、滿洲事變は勃發したのである。之を單に陸軍一部の活動と見る事は能きない、國家衰退の現狀に奮起した一大國民的覺醒運動であります、それ故に事變一度生起するや全國民は、總立ちとなつたのである、彼等は、十有餘年隱忍に隱忍を重ね來つた正義の劍を、抜き放つ可き秋が來たと躍り上つたのである。天業恢弘の皇國の活躍には必ず天祐と、神助とが降下すべき確固不拔の信念が燃え上がったのであります。之を立正安國の信念と申す可きで

するかも知れぬと云ふ危険を、その間に藏して居つたのであつた。かゝる際に我國は、大震火災に見舞はれたのである、惡魔はかゝる落目を狙ふものである。家を焼く事數十萬、人命を奪ふ事十數萬、財を失ふ事數十億、寔に烈しい損失を受けたものである。かくの如き大痛撃を頭腦に喰はされたのであるから、さすがの神國も腦震盪を起して倒れ、一時は回復不可能とさへ見られる、重態に陥つたのであります。爾來非常な奮發を以て帝都の復興を起し、只今では物質的に、漸く回復はしたが形而上の復興國民のこの自覺と云ふものが思ふやうに起つて來なかつたのであります。貞觀政要に「水能く舟を載べ又能く之を覆す」と云ふ事があります、天災と云ひ國難と申すのも、畢竟國民精神衰退の反映であります。

四、國民的一大覺醒運動

災後の國歩は決して平坦のものではなかつた、終に倫敦會議に於て華府條約の缺陷を補ふ代はりに、ある。今や日東皇國民は、人類生活の深奥へ向つて躍進を始めて居る、社會的に、政治的に、思想的に、一大轉回を試みつゝある、亞細亞大陸に對し、否全世界に對し正義の重んずべき事を、力強く教ふべき手段を取つて居る、而かも華々しく雄々しく國力を以て示してゐる。

然るに世上往々この現象を反對に看て、悲觀、失望、落膽するものが無いではない。然しながら支那に對する犠牲の如きは、我國民の人類文化への躍進の途上に於ける貢獻として欣然として參劃すべきである。又社會不安、思想不安といふも、人類文化への過程として看る時は、總て與國の氣分に掩はれて居る。

時恰かも全合衆國艦隊は太平洋に集中された、其砲口は何處に向ふか。滿洲新國家の承認を機會に動く世界の重大危機は、正に太平洋に怒濤を寄せんとす、國際聯盟を動かす背後の力は、その正體を曝露



する日も近い、茲に億兆一心皇運を扶翼すべき秋であります。(終)

一七・九・七一

## 歴史の肯定と超歴史的立場 (其二)

文學士 河合 陟 明

### 序

ヨーロッパ文化の思想史に於て夙に偉大なる足跡を印せし古代ギリシヤ及びヘブライの哲學或は宗教思想が、中世基督教神學に至つて略其の合一を成し遂げ、一般人智の上に巨大なる権能を振ふに至つたのであつたが、近世初頭に於て勃然と起りし『自我』の覺醒は、再び自由なる考察を以て人生の種々なる問題乃至は絶對的實在の真相を把握せんと努め來つたのである。人は永遠の眞理を求めつゝも其の時代又社會の思想界に育まるゝものであれば、其等の時代的氛圍氣に無關心ではあり得ない、寧ろ其の時代の特種の問題として裝はれたる一般的普遍の本質を、明瞭に痛切に感受し會得し、己れ自らの精神を

以て總て受容れた所のものを活かさねばならぬ。而て又之と同時に、其の時代の精神界の指導者たる高遠なる哲人思想家先覺者の如何なる勢力が自己の永遠の思索に及ぼせるかを反省せなければならぬであらう。予は少年の日に於て宿縁の薰發する所なるか既に日蓮聖人の熱烈なる信仰に燃え、はしなくも之を端緒として不遇逆境のうちに種々なる悲惨事を繰り返し、生の辛酸の苦杯を嘗めなければならなかつたのであるが、幸か不幸か其後予は種々なる事情の重疊の爲に我が『絶對的信仰』に深き動搖と懷疑を來たし、遂に哲學の研鑽に身を委ねざるを得ざるに至つた。予が信仰に道を踏み入れてよりこのかた、さりながら予の心の内となく外となく我が生き

むとする——我が求めむとする意志の行手には果てしもなき運命は恐ろしい暗黒を渦巻いた。怒濤に呑み盡された小舟が漸くにして洋々たる大海に浮び上つた刹那再び襲ひ來る嵐にあてもなくさまよひたゞよふ——窮地に陥つた人間が目前に見上ぐる運命の姿は氷山の中からも滑り出て來た様な冷酷なものであつた。其の魂に突き當る鋭さには自己の脈膊の響はすべて蹴落されて了ふ、予の魂は何かな暖かいものを何かな光つたものをと盲滅法にあたりを撫で廻し狂ひ廻つたが、矢張り果てしもない暗やみと冷さがある計りであつた。予の面と面とを接したものは、其の姿の明確であると言ふ點から言つたなら、寧ろ深刻であるといふ方が適切である。何となれば暗やみそのものも冷かさそのものも、觀念や表象の鏡に寫つた反映ではなくして、力そのものであつたからである。自己は暴虐なる其の鐵鎖の中より絶えず逃げ去らうと焦つたのであるが、焦れば焦る程運命は其の姿を明確にして否深刻にして暗黒と冷さは愈々激しくなつて來たのである。予は此に於て始めて『にがき認識』——必ずしも自己の受用するも

のではなく、自己の受用しない所のものが却つて自己を追及して止まないといふ事を悟つた。吾々が要求する所に反對する事實に遭遇し又は之を意識し痛感するといふ事は、其の反對の中に要求されたる事實の姿を認め得たとも考へ得るであらうか。實際予は人生といふものをまだ陰影に於て見なかつた時代には、眞夏の光を受けて孔雀が羽根を擴げて歩く様な誇りと自由を感じた。自己の誇りと自由の感は自己の輪廓の鮮さである、何ものにも自己の要求即ち生活の論理を強ひ得る自負である。然し一人間の激情が如何に多くの人間を不幸に悲しみ苦しませるものである事であらうか。予は常に眞理といふものが自己の掌中にあるものだと思つて居た。然し其れは我儘勝手な眞理であつた事は宛も暴君の御の様なものであつた。予は其の御で以て總てを薙ぎ倒し得ると信じ、總てに向つて突き破つて行つた、而て餘りに所謂『考ふる葦の葉』の身分で以て御の暴威を逞うした。然し相手を切つたと思つて居たのは、却つて皆自己自身が切られて居たのである、我が周圍我が仲間我が社會、人生の凡ての低級と猥雑とを超越し

て獨り「光榮なる孤獨」に高吟し高踏したと思ひ居し我れは、やがて皮肉なる失意の谷底に顛落せしめられたのであつた、自負の劍鞘、自高の慘敗、個人を襲ふ社會の——特殊を蓋ふ普遍者の——個物を脅かす外界の壓力は大きい。予の誇と自由とは燥狂の夢みる他愛も無い幻であつたのである、結局予は繫縛のどん底に陥つてゐたのであつた。天上のこのみを盗み食つてゐる間に地獄の扉も戸を開いて待つて居るのであらうか、「人生」の見えざる理法は決して容易に人を許さない、其れはにがき熱き涙で酬はれねばならぬ。運命の前には人は如何に荷ひ負へる犠牲を拂はねばならぬのであらうか。信仰の名に於て人は如何に迷妄や罪惡に——人生の誤謬に陥り行く事であらうか、或は自ら知らずして、否或は自ら知りつゝさへも尙自己を罪惡の絶望に騎り立て行く、「絶せしめよ死せしめよ、何人も祈る勿れ予が救はれ得るを」神の怒、神の責罰を我れと我が手で我れ自らに降すのであるか靈の信仰は却つて肉を、神の道は却つて罪惡を刺激し誘惑し挑發する、人生は其のまつたゝ中に飛び込んで始めて知る無限の錯

綜である、闘争である。神と惡魔とを呑み干さんする宇宙的體驗の要求には然乍ら世界苦の受難が伴はでは止まぬ。「自己程懐しくして然も自己程現はしきものは無い」とは實に近代人の自我意識なのであらうか。予の運命は人生の總ての否定的なるものにまみれ落ち、然も遂に之を突破し超克して行く所に存するのであらうか。人生の暗黒面を劈き貫いて然も尙一脈昂然たる信仰の氣概を予は把持し來つた筈ではあつたが……「我は塵と灰なれども我が主に言上す」と人類の古老の叫びし所のは果して何物であつたか……

願れば予は信仰の嵐よりこのかた闇を突いて沙漠を旅行く生活であつた。信仰が幸福であるか否かを予は知らない、唯予は苦杯を嘗めつゝ信仰を語らねばならなかつた。予は信仰に失脚し信仰より顛落し懷疑し煩悶し絶望しみぢめにも深く傷ける自己の魂に自ら嘲笑し冷笑しつゝ、然も尙何ものか懺悔の道を真理の學なる哲學に求めねばならなかつたのであつた。光明と活力とであるべき信仰は予には却つて暗澹たる闇の姿であつた。光の消滅せる處には凡て

の窮屈な空間的約束が破られて不可思議の世界の扉が開く。予は人生の内奥の測り知り得ざる神秘の力に——否予は人生の存後の凄じき秘密の魔力に、恐れと戦きにふるへつゝ埒し去られたのであつた。偉大なる運命の威力の前には真理はもはや沈黙する、實在の神秘はもはや人智の及び得ざる不可思議境である。豫言者が桶の水の一滴さへも漏らない間に此の世の端から端を騎り廻つたのも此時であらうか、凡夫が肉と骨とを脱ぎ捨て、涙の河に其命を洗ひ淨めるのも此時である。然し豫言者の顯す不可思議はまだ不可思議でない、不可思議は凡夫のうちに現れるから不可思議である。

不可思議は現實と空想との鏡目に其姿を封じてゐる。故に不可思議に遭はんとする者が現實のうちには没頭する限りは不可思議を字引の中に見出し得るだけである空想の中に沈溺する限りは不可思議は詩の行と行との間に隠れて了ふ。不可思議は凡夫が何ものかの鐵腕によつて現實と空想とのどん底に押しつめられ身を齧さざるを得ない時に見出す實在である。下手に廻れば我が命の行方さへ解らなくなる境

地である。それは黒暗々の無底坑である。そこでは涙が笑ひ顔が輝く。

かゝる境地はこの世の真中に住む者には夢にも見えない所である。然し半ば斷崖から脚を踏みはずして居る者が生きて行くにはとてもなくてかなはぬ所である。天才と動物にはどうか知らぬが、凡夫のふるさとは確かに此處にあるらしい。をかした事に、さきに巨大なる世界であつたかの現實と空想とは今になつて見ると此の坑の入口に懸つてゐる蜘蛛の巣であつたのだ。思想上これにひつかゝる事を「論理に生き埋めにされる」ともいふ。真理の戸外に立つて怖る／＼これを窺ふ者は常にこの蜘蛛の巣で顔をまつ黒に包まれる。現實と空想とのどん底に陥つてもはや現實からも空想からも見離された者は、この無底坑の暗からひたすらすべてを見つめる外はない。何となれば彼は此の中から匂ひ出ればまた此の中に飛び込まなければならぬ身分であるのだ。そこには彼の住むべき空間が無い。其故彼にはこの坑を外にしては現實も空想も無いのである。然し現實と空想とに呑み盡されたものが却つて現實と

空想とを呑み盡したものであるといふ事が認められるならば、これが受取れないとはいはれまい。

無底坑の眞理は論證されるものでもなく論證すべからざるものである。然し妥協の論理は常に此の最後の事實を認める事が出来ない。或者は眞理は論證せらるべきものとして中心點に一向近づかぬ木馬のやうに只其の周圍を廻轉する。或者は眞理は論證すべからざるものとして赤道に立つて極光を思ふ様に、光るものはわが見ると見ざるに拘らず光るといふ。死せる概念の壘壁を築き上げる事によつて満足の出来る者にはそれで結構であらうが、絶望の深淵に臨んでひし／＼と戀ひ慕ふ所の眞理はかゝる外面的な論理では其の姿を見せて呉れない。

絶えず眞理に於て考へるといふ事は、尠くとも其の中に身を投げ入れた者には絶えざる救済の深化である。分析し盡す事の出来ない「我が生の秘密」は實在の源泉であり、人格の故郷である。此の究極眞理との内面的交通と共に、人は自己の「新生」に直面するのである。予は此の新生こそ信仰的生活の裡に生くる者にとつては將又哲學的思索の裡に住む者

自己の罪を悔ゆる過程である。懺悔が無いならば哲學が無い。故に眞に考へる者は皆罪人でなければならぬ。考へざるを得ないやうな境遇と性格とを以て此の世に現れた者は只肉と血に包まれた骸骨として觀るならば決して楽しい生を享けたものではない。かゝる者は聖なる恩寵に依つて照さるゝに非ずんば決して生きて行くに値ひせざるものである。聖なる恩寵とは眞理に依つて自己の罪惡の途に許されざる事を知る事を許されたる無上の權利である。この權利は聖像の前の啜り泣きか、手を組んで深く胸にうなだれるか、或は合掌のさながらなる祈の秘め言に依つて實行すべきものである。此の場合にはどうしたつて歌ふ事が出来ない。必ず彼は深い／＼瞑想に耽るであらう。最も尊い哲學は許されざるに透徹するところに成立つ。

眞理は至剛にして至柔なるものである。眞理は決して自己を掩め歪め曲げるといふ事はない、秋霜烈日の嚴を有する眞理は決して容易に人を許さない、而て此處に却つて人の救済され得る所以の根據が存するのである。固より人間の行爲が毎に如何程純理に

にとつては、眞實の論理であると信ずる。自己のこれまで辿つた生活を新生の光に照して見るならば凡てが罪惡であり虚偽である。新生は罪惡の自覺と共に始まる。其れは氷の中に焔の燃えた時、闇の中に闇が光つた時である。罪惡は罪惡の自覺に於て生れる。新生は罪惡を滅ぼすものではなく、寧ろ其れを認めるもの、生むものである。思想上認めるものは即ち生むものである。故に新生の始まらない前には罪惡といふものがない。新生の發展は罪惡の發展である。而て新生に入る事は言ふ迄もなくかの無底坑に降り立つ事である。現實と空想とはこゝから見つめられて始めて生れる。兩つのもものは罪惡といふ名に於て始めて神の世のものとなる。罪惡ならざる現實と空想とは淨土にとりては用の無いものである。

我が靈の救済を求めて眞理の宣言者なる哲學は、神の法廷の前に立てる罪惡の裁判官である。されば眞理に於て考へるといふ事は自己の罪惡を懺悔する事であり、思想の發展とは懺悔の純粹になり行く事である。従つて神自身ならば知らぬこと、現實と空想との中から蘇つて來たものには、新生とは絶えず

順つて爲さるゝやといふ事は人生世間の境界に於ては、一個の問題であらう。さり乍ら吾々の純潔なる懺悔に於ては必ず徹底せる眞理を把住せむ事を求めては止まぬ。眞理の學徒として哲學者は出來るだけ論理的に嚴密ならんとしてゐる。之は哲學史を緝くならば何人にも氣の附く事柄であらう、現代の哲學者も亦益々此の方向に努力して居る。然し之は何の爲の努力であるか。予の所謂懺悔としての哲學に於ても此の論理的嚴密が要求せらるゝであらうか。然り哲學は懺悔であるが爲めに愈々論理的に嚴密ならざるを得ない。のみならず之が爲に嚴密である事が何の爲の努力であるか、明瞭になるのである。思想の嚴密とは許されざるに透徹して懺悔の一念に根據を有せなければ強き要求として現れ得るものではない。單なる嚴密の爲の嚴密は言葉の遊戲である。勿論懺悔としての哲學から見れば人世の事すべてが遊戲である。哲學自身さへ信仰そのものさへ遊戲である。然し予は言ふ——人生の凡ての戯れを打ち貫いて一種儼乎たる不滅のものがある、人生の總てが戯れであるにせよ悲喜劇であるにせよ道化

芝居であるにせよ、遂に有限の世の中に亡び行かざる或物が——戯れの巷より超え出づる犯す可からざる或物がある、此處にすべてのものが死して生くるの道が存する——然り懺悔の一念に徹して居る所からはすべてが嚴肅である。嚴肅とは眞實なる要求より流れ出でたる嚴密を指す。

或は之に對して懺悔としての哲學は論理的ではない、實踐的である、純粹眞理の談道ではない、實用主義的である、故に其れに依つて得られたる嚴密は實踐的嚴密であつて理論的嚴密ではない、前者に依つて後者が得られるとするのは實踐と理論、實用と純理とを混同したものであると云はれるかも知れない。斯様な疑問は普通誰にでも起り易い所である。殊に哲學者は思索と名付くる水晶の高塔に世俗を超越して先天の夢に耽るべきものであると考へるものは、懺悔の哲學は低級なるお説教に墮落したものであるとするであらう。併し乍ら理論と實踐との限界は如何なる約束に依つて成り立つものであらうか、哲學と説教と手を別つ所は何に依つて定められるのであらうか、抑も我が人格の實踐なるものを外にし

ての理論は如何なる權威を有ち得るであらうか、否抑も嚴肅なる人格的根柢眞理に己れ自らを律する時、兩者の名はもはや何處に存するであらうか。眞に人格なるものの意義は、其が如何に眞理を把住し眞理を内化し眞理を蓄積し、如何に眞理に於て自己を律し自己を根據づけるかといふ所に存するのである。信仰に於て將た哲學に於て苟くも嚴肅なる自己の懺悔を見んとする者は、凡ての人爲と偏見とに幻惑されない事を努めるだけである、ひたすら根本的ならん事を熱望するだけである。自己全體を無底坑の中に投げ込むだけである。而て深く強く自己の罪惡を悔ひ思ふ。但し罪惡といふと餘りに狭い意味にとられ易いのであるが、予の云ふ罪惡とは、苟も人間が本質的に無明の迷妄を脱却せぬものである限り、人生の活動全般に付き纏ふ陰影又暗影を如何ともする事は出来ないであらう。而て之をあらはに自覺せる者には懺悔が始まる、理論と實踐、哲學と説教との對立を超越したる至深至高の哲學が始まる。

斯かる哲學は聖なる恩寵の中に生ける論理であつて一切に超越し乍ら一切に同情を感ずる世界苦痛の

自覺である。眞の哲學者は自己苦痛、自己罪惡を世界苦痛、世界罪惡として自覺するのである。彼は人生の運命の代表者と爲り其の受難の犠牲者たる事を甘受するのである。否而て實に其の罪惡救済の治術を探索せずしては止まぬのである。

現代の哲學者の多くは文明批評文化支持を以て自己の誇るべき天職であると考へ、眞理の開導者人生の匡救者を以て自ら任じて居るであらうが、其の意氣や頗る壯とすべきである。然し彼等は此職に任ずるといふ事は極めて大なる受難の使徒たるものである事を決して忘るべきではない。彼等は果して自己に於て世界苦痛、世界罪惡を眞實に自覺して懺悔の一念に徹してゐるであらうか。若し然らずんばメフィストから笑はれるのみか神からも笑はれるであらう。

予が信仰の嵐の中に没落し行き、其の廢墟より煙り出でたる哲學的思索眞理の思慕は、予が死滅に瀕

せし信仰の——龜裂せる意志の——破産せる性格の——糜爛せし情欲の、慘澹たる世の劣敗者としての運命悲劇の中に求めし懺悔であつた。當時予は如何ばかり現代の思想界の先覺者哲人の眞理の書に、眼を曝して靈性の深き救ひを求めたであらうか。予が再び學窓に學びてより此等の學壇想界最高峯の一流の巨人の、或は深き反省的、内觀的、哲學者的講義の、或は高き睥睨的、靈感的、豫言者的説教の、如何に我が靈性の内奥に深き——響を與へたであつたらう。漂渺たる運命の波濤に翻弄されつゝ人生の圓らざりし秘密の嵐に狂ふが如くまことのものを求めし魂には、實に其は救済的講義であり、福音的説教であつた。見よ巨人の口を劈いて出づる眞理の轟き！聞け我が耳朶を劈いて入り來る救済の福音！嗚呼眞理は何故にかくも人を救ふものなのであらうか、予は只無限の思に於て沈黙するばかりである。何となれば其は餘りに予に切實なる事柄であるからである。眞に「知」は超越であり救済であり解脱である。知は人格の自由である。知ることに依つて、知ることに於て、人はものに溺れる事も出來ると

同時に、又そのものより超え出づる事も出来るのである。知は存在の高次の立場への指標である。予が永遠のものを求めての真理の思慕は、我が生の意義を、我が隠れたる秘密のものを淨化し靈化し罪を悔ゆる懺悔の嚴密になりゆかむ事を求めてであつた。之を思想に於て體認するには自らの生命を論理の中に投げ入れ、我が魂を思惟の中に織り込まねばならぬ。此の如き考には論理自身が飯を食ふ事になりもしやう。否それ所か論理自身が喜怒哀樂そのものにならなければ思索に身を委ぬる者に何の眞實何の力があらう。如何に思想の大體系を持つて居やうとも、如何に多くの言葉を知つて居やうとも、要するにお目出度い面々であると言ふの外はない。かやうな者には涙も笑はず開も輝かない。併し思惟がそれ自らを深く思惟した時には、迷妄や罪惡や誤謬の思惟にも何等か積極的な意味を見出し得ないであらうか。實際信仰の深い自覺は惡の内にも強い善の輝きを感じ得るのである。其れと同じく思惟の深い自覺は誤謬の裡に却つて鮮かな真理の光を感じ得られる事と思はれる。然らずんば思惟が誤謬に陥ると

いふ事が既にわからぬ事となる。吾人が誤謬を理解し罪惡を自覺し得るは疑も無き事實である。否豊富なる生命内容を有する具體的實在程、誤謬や迷妄や罪惡に陥り易いのである。されば誤謬は何か或積極的な可能性を有せなければならぬ。思惟の根本に於ては誤謬も眞理と同様に其の成立權を持つ、即ち根本的思惟、或は哲學的思惟では誤謬は普通よりも深い意味に於て眞理である事になる。我々が罪惡を懺悔し誤謬を自覺するを得るは實に斯くの如き眞理の基礎に根據するのである。否行爲の惡は思想の誤謬に由來する。知識の原理と行爲の原理とは深く源を一にする。苦樂は善惡に由り、善惡は迷悟に由り、迷悟は無明と法性に由る。然し形式的思惟に安んぜぬ哲學では兩者の深き内面的關係を求めずしては止まぬ。哲學はすべての反省の學であり、純粹に自己自身の根柢に還つて其處よりして純内面的全體を把握せんとするものであり、一のものに依つて一切が實現されるものであるから、自己同一性は無限の差別性を含蓄して居なければならぬ。一は特殊的内容を含蓄せねば單なるゼロに過ぎない。故

に内面的全體は外面的部分を内包する、外面性差別性の理解の可能はそれが内面性の内にあるからである。自己同一性の内包的彈力が差別的他者を外延的に包攝する原理となる。故に内面性同一性の程度に外面性差別性がそれに依つて内包される程度が比例するものであると云はなければならぬ。前者が相對的ならば後者も相對的であり、前者が絕對的ならば後者も絕對的である。

従つて嚴密に眞偽の差別を知るには眞偽の一なる所以を知らなければならぬ。美醜善惡に就ても同様である。眞實なる懺悔に於ては眞偽善惡を超越する。眞に考へるといふ事は懺悔することであり、思想の發展とは懺悔の純粹になり行くことである。自己と眞理との内面的關係を觀る所に眞に考へるといふこと即ち懺悔するといふ事があるものだとするならば、我が懺悔なるものは已一個の胸中に閉ぢ込めて置くべきではなく、進んで萬人の石に打たれねばならぬ。其處に眞理の検討があり、其處に思惟の純潔があり、其處に自己裁斷の嚴格さがある。眞理は決して凡夫たる自己の獨占ではない。若し予の生活に

哲學といふものが意味深いものであるとするならば其は懺悔の哲學といふべきであらう。眞理は恒に自己の前に於てのみならず、凡てのものゝ前に於て懺悔を要求する。眞理は決して許すものではない。此處に人間の運命がある、此處に人生の受難があり、此處に因果の大理法がある。然り此處に神の恵みがあるのである。此の決して許さない所に眞理の大慈悲がある。是に依つて凡夫が超人と成る。眞理自身若し優柔であるならば人間は遂に蚯蚓になり下つて了ふに違ひない。

予は眞理が何故に人を救ふものであるかの切實なる問に答ふるの邊なき裡に既に此の事實を現實に體驗した。予が學びし哲人思想家の救濟的講義、福音的講義は予を眞實に懺悔せしめ、予の魂に慰めと安らひと無限なる思ひとを齎したのであつた。然し予は尙求めた、予の靈は尙渴するが如くに求めた、予は此等の思想家や西歐の哲學に尙求めて得ざる、求めて與へられざるものがあつた。予は哲學や神學の書に細き／＼奥深き道を拓きつゝ尙達し得ざる所のものがあつた。他面予の運命の流は幾度びか波瀾に

鬪弄され吞吐されつゝ、其の解決の地に切迫しつゝあつた……果然兩者は撃突した、合流し撃節したる予の運命の迫力は此の解決の秘論を提げて思索の眞を涌出し呈露せしめた。「不可思議なるは豫言者の歌よ、二重に不可思議なるは現實にこそ」と深き詩人の歌ひし運命の不可思議、生の秘密は果然予を打ち貫いた、感覺的欲求の漲り溢るゝ深淵に於て予は靈的欲求の最高峯に突つ立つた。「存在の形而上的旋回」予の運命は此の宇宙的大空間を撫で切り了つたのである。プラス無限大の極處に於て忽然としてマイナス無限大の尖端に接した。「自己の現在」——「我が人格」は全實在の重心として無窮遠を走る極線の極である。人生の相反對立的あらゆる二面が此間に亂舞し交錯する、叡智界と感覺界と——靈性と肉感性との——人間の荷ひ負ふ運命の内面的矛盾に電流が通じ火花が飛ぶ……此處に人生の神秘劇がある。此處に人生の默示録がある……悠久なる時間の回廊もしくは進化の永遠なる雲梯の「こゝ」——「そこ」及び「かしこ」に於て我は輪旋の舞面を彈ぜん……とこしへなる秘密の幻の迷宮に運命の意

涯は此の人格を以て最後とする、青春あはれいくたひか、思へば惜しき夢なりき、予はいとも大いなるものを得て、予はいとも大いなるものを失つた、其は予の運命の決算なのであつたらう。思へば皮肉なる懊惱と皮肉なる歡喜である……予は此の無限なるあきらめの思に於て遂に生の憂愁の苦杯を呑み干した。さあれ黑暗々の無底坑の暗の夜に、神に讃歌を捧ぐる程の雅懐を持ち得るの地ではあつた……そこ予が現在生きて居るといふ事實は、予以外の或る大いなる力を豫想しなければならぬ事になるであらう、其の恐ろしい凄じい力が予のあの生活を逆流せしめて生活の本流に導いたものと考へなければならぬ。予はかくて遂に不可思議の世界の扉に手を掛けたのである、否不可思議の世界の殿堂の内に恍として予は埒し去られたのである、其處に君臨するものは何か、其の寶座に王者たるものは何か——信仰の復活——更生——久遠本佛の信仰、永遠實在の佛陀本覺の如來釋迦牟尼の信仰、佛教に依りて法華經に依りて、日蓮大聖人に依りて教へられたる無始劫來の大恩教主慈父大覺世尊釋迦如來の信

匠攝理の意義我は人生の聖扉を開かん……ほのゆらぐ叡智の光明をともしびに我は思索の殿堂に靈交の法樂を奏せん……お、我が靈よ、我は汝に「今」が「曾て」及び「何時か」と叫び、而てありとしある「こゝ」「そこ」及び「かしこ」に於て、汝が輪旋の曲を舞踏せよと教へたり。お、我が靈よ、我は汝に嵐の如く「否」と叫び……廣闊なる天空の然りと云ふが如く「然り」と言ふべき權威を與へたり光の如く靜かに汝は立ち、吹き荒ぶ嵐を貫いて汝は行く。……お、我が靈よ、我は汝に凡ての造られしもの及び造られざるもの物皆の上に汝が自由を恢復し與へたり、而も誰かまた汝が知るが如くに能く將來の歡喜を知るか。……予が靈の把握の無上のものを持つて歡喜の絶頂に狂へる時、予が靈の獲得の最勝のものを持つて凱歌に高く翔翔し居る時、我が希望我が理想我が終始し來れる純潔の或深き願は、一撃鐵鎚を受けて失意の谷底に轉落せなければならなかつた。靈の高き／＼獲得が、さりながらにがき／＼涙を以て報はねばならぬとは……あゝ人生は再びはあらず、況んや予の地上的生

仰、是が予の運命の幾旋回の後に、幾多の犠牲幾多の受難のへめぐりの後に遂に到達し得たる最後のものであつた、是が予の眞理の探求眞理の思慕の幾多の迂餘曲折を経たる後に遂に到達し得たる最後のものであつた。絶対の大眞理をあこがれ求めて絶対の大人格へ——絶対の學、實在の學、眞理の學なる哲學が、遂に辿り着き得たる所の最後のもの——最高最深最尊嚴なる人格實在の信仰へ……あゝ佛法の大哲學と大信仰……自己の純潔、自己の靈化、自己の淨化を求めて眞理の明鏡に映りゆく思想發展の純粹を求めて、論理の嚴密正確を追ひ行きし懺悔の學なる哲學は、其の懺悔の一念の徹する所、無限大に延び切つた無限大に發作したる懺悔として、久遠本佛の大人格に對する至純なる懺悔の姿となつて現れたのであつた。今や眞實なる大哲學は、其の至高至深の境界に於て、竟に大信仰と一如するものなる事を自覺した……信仰は大なる甘えである、さりながら大いなる嚴肅なる甘えである、時あつては否根柢的に常に我が身命を惜まざる——「偉大なる佛陀への嚴肅なる甘え」である……是が「眞

理に於て自己を懺悔する』思想の運命の最後の到達地であつた。

予が再びめぐり廻りし信仰は、かの少年の日の熱火の信仰が懷疑と煩悶に墮落し、失脚し、敗退して哲學に懺悔を求めたりしが如く、今や復歸し蘇活したる我が信仰は、予が種々なる滋味を嘗めつゝも尙不備、不備、不融にあきたらざりし哲學に對する懺悔の意義を有するものであつた。歸つて思ふ、予が信仰より去つて哲學に移るひゆきし後も、其の眞理の思索、神の愛慕にはかの一度び植ゑし本佛の信仰本佛の思想が猶いづこにか深く細くかすかに流れて居たのであつた。予の心は全く哲學の魅力に酔ひしれつゝも、否眞理に酔へる事を我と自ら知りつゝも、尙かの曾ての信仰は其の電磁的力線を見えざる心靈の空間にひそかに投げて居たのであつた。幼き日に歸るの心、信仰の——然り心靈の力學、予は今此の我が心靈の内面界の事實を看取する、其は予の反省に現るゝ明らかなる記憶の事實である。信仰にめぐり廻りし今日に於てこそ始めて予は此の神秘なる心的事實を指摘するを得る——歴史哲學的に——

宗教は歴史の母胎であり、又目的であるといふ事は予は理解する、價值發展史觀より觀て之が人生の理法であるのであらうか。信仰の忘失、哲學への躍入其の思想に於ける、眞理に於ける種々なる模索彷徨追求は、再び信仰に——然り今や此の度びこそは、絶對の思想、絶對の眞理に根據せる最後第一義諦の此の信仰に落着き、安らふに至る迄の、『み佛の慈母のむなぬちに抱かるゝに至る迄の』思想發展の、眞理發展の、我が情操の純化の道程であつたのである。『今ぞ聞く、鹿啼く野邊に霧晴れてもとこし道も隔てなしとは』人生の漂渺たる曠野に於て、人生の戯れなるを打ち悟りつゝ、しかも戯れの中にありて限り無き誠を盡すこそ、人の世の運命と思ひなして、唯高き眞理の愛慕に少しくを得ば足れりとなしつゝ、たゞき貧しき貧人乞食の流浪の旅を甘んじて續け居たりし『世の一介のさゝやけき哲人』たりし予は、果然我が生の背後に全實在界を負うて、靈界の絶對的權威を以てする本化地涌の菩薩として、本佛久遠の高弟として、我れの否群生の濟度自ら任じつゝ全人生の存在界に君臨し來つたのである。

あゝ哲學の一學徒としての白面の一青年より、上行の流類地涌菩薩の大自覺へ——我が一生涯に於て是程鮮かにして且深刻なる轉身はない、回心はない、更生はない、蘇活はない、我と及び我が世界は全く面目を新たにした、全宇宙の意義、全宇宙の風光……不可見の心靈界に於て全實在が凄じき一大旋轉を爲し了つたのである。激潮として信仰の力、宗教の權威尊嚴が現實界を蓋ひかぶさつた、一切を靈化し、菩提化し、功德化する——一切に脈々たる、躍々たる活力を與ふる——我が背後には本佛を負うて我は天地の中心となつた、我は宇宙の樞軸となつた、一切を支配し一切を大觀しては蠢爾たる億萬の群生苦海に没在せり、如何にかして此の群生を救濟せん、法華經の行者は我である、大聖釋尊を仰ぎつゝ日蓮大士をしのびつゝ……

思へばかの少年の日の本佛と本佛の世界とを——信仰に據る實在者の世界を失ひ果てゝ、哲學の迷に道ふみわけたりし日の長かりし事よ……俄然目は覺めた、歸心矢の如く本佛にかへる——たゞひたすらに我は……『つひに又いかなる道にまよふとも

ちざりしまゝのしるべわするな』或は『彼の久遠を觀するに猶今日の如し』と云ひ、或は『自ら減度せりと謂ひ、資生艱難にして少しを得て足れりと爲すも、一切智願猶在つて失はざりき』と云ひ、或は『我等も亦是の如し、世尊は長夜に於て常に惑んで教化せられて無上の願を種をしめたまへり』といひ、或は『世尊は甚だ奇特にして所爲希有なり、世間若干の種性に隨順して方便知見を以て、爲に法を説いて衆生の處處の貧著を拔出したまふ、我等佛の功德に於て言をもつて宜ぶること能はず、唯だ佛世尊のみ能く我等が深心の本願を知ろしめせり』といひ、或は『謂はざりき、今忽然に希有の法を聞くことを得んとは。深く自ら慶幸す、大善利を獲たりと。無量の珍寶求めざるに自ら得たり』と云ひ、或は『貧人此の珠を見て其心大歡喜す』と云ひ、或は『四方に馳騁して以て衣食を求め漸々にめぐり行いて本國に遇ひ向ひぬ。其の父先きよりこのかた子を求むるに得ずして一の城に中止す、其の家大いに富んで財寶無量なり、金銀瑠璃珊瑚琥珀頗黎珠等其の倉庫に悉く盈溢せり』『大富長者は則ち是れ如

來なり、我等は皆佛子に似たり、如來は常に我等をこれ子なりと説きたまへり」『此れ實に我が子なり、我れ實に其の父なり、今吾が所有の一切の財物は皆是れ子の有なり』と云ひ、或は『若し我が深心を知らしめて爲に授記せられなば、甘露を以て瀧ぐに熱を除いて清涼を得るが如くならん。飢ゑたる國より來りて忽ちに大王の膳に遇へらんに、心猶疑懼を懷いて未だ敢て即便ち食せず、若し復王の教を得ては然して後に乃ち敢て食するが如し』と云ひ、或は『諸の衆生に、種々の性、種々の欲、種々の行、種々の憶想分別有るを以ての故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して若干の因縁譬喩言辭を以て種々に法を説く、作す所の佛事未だ曾て暫くも廢せず、我れ諸の衆生を見れば苦海に没在せり、かるが故に爲めに身を現ぜずして其れをして渴仰を生ぜしむ、其の心戀慕するに因つて乃ち出で、爲に法を説く、神通力是の如し』と云ひ、『今法王の大寶自然にして至れり、佛子の得べき所の如きは皆すでに之を得たり、世尊は大恩まします、希有の事を以て憐愍教化して、我等を利益したまふ、無量億劫にも誰か能く

報する者あらん』と云ふは實に予を今適切凱切に打ち打つ言葉である、あゝ宗教的更生の深き理を予は知る、宗教の教の如何なるものであるかを予は今知る、人生の内奥を流るゝ宗教の奥義、開顯せられたる人生の歴史……『いづこへ——さらば我等は行くや』——『いつもふるさどさして』——我がたましひのふるさどへ、そは懺悔の純粹になりゆく過程であつたか、予のにがき運命は、されど又恩寵の攝理と本佛の攝護といはるゝのであらうか、大懺悔、大莊嚴懺悔、無罪相懺悔といふ秘義ふかき言葉を予は思ふ。

信仰に蘇活したる後に於て、然乍ら予は尙幾度か心靈の地震に際會せざるを得なかつた。最高の思想最高の真理であるべき我が信仰は、果して何處に於てかの哲學より打ち超えて居るのであるか、我が本化の教學は果して如何底に彼等に勝つて居るのであるか、予は現代の思想界の巨擘に學び、其の思想、其の真理、將た西歐の哲學神學に打たれ來つた、それは鮮かに且深刻に真理を明示するものであるからである。そこには懐しき深き絶ち難き魅力がある。我

が誇る所謂本化別頭の教觀は如何、信仰にめぐりかへりし後に於ても、予はかの巨大なる哲人の教ふる思想の真理よりして如何計り凄じき脅威に襲はれた事であつたらう。學窓の階上の講義の一室に於て、歸り來れる我が書齋の内に於て予は戰慄し、恐怖し、叩きのめされ、打ちのめされ、ズタ／＼に切り苛まれた、其の強烈なる迫力は予の信仰を本質的に根柢よりして震撼するものであつた、真理を以て自己の生命とせる思想家にとつて、こは實に致命傷である、予は幾度か寢食を廢して此の難問の解決に苦しんだ、悶絶せんばかりに苦んだ、予の信仰は其度毎に又強靱なる弾力を以てこの魔の如き脅威を撥ね返しつゝ、然も益々真理への苦悶は深まつたのであつた。我が所謂絶対的真理界に於ける必死の努力は容易なものでない、見えざる無形の真理を相手にしての戦は苦しい、實在界に切り刻んでゆくメスの鋭さは、尋常一様のものであり得ない、生のあらゆる樂みは凡てこの爲めに薙ぎ倒され拂拭されて了ふ、如何なる事をしてゐる時にせよ、一度び實在の真理の問題がムク／＼と頭を擡げるや、其の仕事其

の心境は全く蓋はれて了ふ、まつしぐらに實在の世にひた攻めに攻め込んで行くのである、感情に陶酔する事はもはや全く許されぬ、嚴肅主義は此點にては機械主義である、味氣ないものである、眞善に化成せざる一切の美は斥けられて悔いなき……別頭の教觀本化の知見なるものを背後に控へつゝ、も、予なる一窮措大が學界思想界の權威者宿哲を向ふにまはして、面も途に之を打ち超えむとするのであるから、自家の信仰將た宗學教觀に深き自信、確信、信頼と思想上の大膽とがなければ、此の威力——此の我が絶対信仰の威力を十分に發揮する事は出來まい、此の解決を迫つて彌々論理の嚴密精確と透徹せる知見識見が要望せられる、我が人格の靈性の要求の、否靈肉両面の欲求の、否更に人生及び宇宙のあらゆる方面を眺め渡し、あらゆる意義を眞趣を大觀し省察するを要する。斯くて然乍ら予は遂に深く自ら期する所があつた。予は長き真理の戦場に於ける惡戰苦闘の後、遂に本佛の信仰こそは凡ての教説、凡ての哲想に勝りて無上最尊なる事を、然り最も予の満足し得るものなる事を知つた。信仰とい



ふ第一義諦の問題は——即ち吾人人生の思想體系の最後の善は、常に鋭き論理の嚴密のみならず、宇宙人生觀に於ける雄渾なる高き、併も深き大なる綜合的調和圓滿の實在觀を要求する、然り而も此處にこそ眞實なる要求より流れ出でたる論理の嚴密としての嚴肅さがある。眞善美の、智情意の、靈肉兩面の生命の欲求の永遠に亘る絶大無限なる圓融具足、我が絶對の恐ろしき凄じき願は我が本佛の信仰に依つて全く満たされ得る。又此の信仰ならでは我がもろもろの總ての願は究竟して満たされ得ない。此の信仰の確認には思想の大飛躍がある、靈性の權威的自由がある、人格の尊嚴なる意志決斷がある。然り此處に「信仰の叡智」がある。是の如き信仰は是の如き人格を生んで來ねばならぬ。是の如き天眞明瞭綜合圓滿の思想の威力は、信仰の活力は、信仰の慈智光は、又是の如き尊嚴圓滿の慈悲の人格を形造らねばならぬ。予は此時、始めて本多日生師に接した——否かの少年の日名古屋に於てより再び始めて、全く新たな心境に於て——「斯人」！に接した、其の人格風貌に親炙し其の信仰思想を潤ひ浴びた。予

は其の福音の教書を貪り讀み、予は其の救済の説法を貪り聞いた。あゝ我が靈の救済「佛法の大濟度！」……予は少年の日より學途の最後に至る迄の間に、日本武士道的、古英雄的、東洋的、又泰西的識見高邁なる哲學者的或は峻爾として聳え立つ巨大なる豫言者的——種々なる靈界思想界の偉人に接した、予は「一人格が如何に宇宙を吞吐するか」てふ事に關して殆ど典型的偉人の一群に接し來つた、予は此等の人格より深く／＼學んだ、根柢的威化影響を予は此等の人格より蒙り受けた——一人格の宇宙的態度——そは一人間の思想及び存在の全部である。是の如きもろ／＼の人格と、其の眞理思想の影響の蓄積を予より抜き去らば殆ど何物も予には残らない、然も猶人格、眞理兩つ乍ら予は此等の人格に究竟して満たされ得ざる懺らぬ或物があつた、而もそは此等の先覺者に於ける致命傷であつた。是の如き偉人の一群の系列の最後に於て予は實に本多日生師なる人にめぐり會つたのであつた、……予は見た、予は感じた、……予は巨人「本多日生」を滿喫した、此處に「人格と宇宙」との予が

觀たる、典型的如是相がある、對宇宙的態度の人格儀表がある、此處に、天地の間に立てる一人格の根本的形相がある——一人格が如何に此の人生を、如何に我が生を處分し行くかの原型がある、予は聖應日生師を通じて遠く日蓮大聖人の雄風を慕つた、予は聖應日生師を通じて更に遠く遙かに大聖釋尊の威風をしのんだ……聖應院日生上人は予が求道攻學の生涯に於ける最後の恩師であつた、最後の人格最後の眞理であつた。

今や予は達し得べき宇宙的人格態度の高峯を大觀して、「人格と思想」との清算を爲し了りたる後に於て、更に新たな否實には連續的なる彌々深き眞理を尋ねての佛道の、求道の旅に登りつゝある。此の「歴史の肯定と超歴史の立場」なる一小論稿は予が過去に、此處に來る迄ひたすら眞理のふるさとを尋ねて、如何に眞理の荆棘艱路を辿り乍ら、幾度びか躓き戦き脅かされつゝ憤悔し反省し、苦悶しては我が魂の安らひの國を探し求め、あこがれ求め途に見出し辿り着きたりし其の迷路遍歴の名残りである。然し予は此等の思想の迂餘曲折を常に迷路とのみは言

ひ捨て難い、其處には學ぶべく又擲取すべき様々の眞理がある。予は尙茲に深き／＼愛着と魅力とを感ずる。日蓮聖人の信仰教學は決して思想的倚形兒ではない、否一切の人文思想の體系を吞吐包容しつゝ、尙其上に優に勝れたる無上尊嚴の眞理を教ふる所に存するのである。所謂宗教進化の最後の段階に於て一の具體的個性的積極的なる歴史的に成立せる絶對宗教として、其れ以前の凡ての思想を包攝擧揚し蘇活開顯せねばならぬ極めて包容力あり、同化力あり、襟度誠量あるものでなければならぬ。是が大王の統一教學である。是が經王法華の教觀である。若破若立法華之意と云ひ、或は破立の決一に法華に在りと云ふ、此等前階段としての諸の思想は、宛かも權大乘の内容と謂はるべきであらうか。然乍ら此論文は單に諸種の思想の根柢或は結論とも云ふべきものを、極めて概略にスケッチし論評して更に其の背後の體系へと進み行きし一の習作たるに止まり、決して其等の眞理内容の本質を論理的に展開したるものではない、又法華經開顯の思想の論據も單に一面の考察に過ぎずして到底十全なりとは云ひ難い、既

に數年前の一時の舊稿でもあり、遺憾ながら此點に關する精細は更に他日を期せねばならないであらう。かの燦爛として咲き誇りし花も實もある思想の花園を今は只素通りせねばならぬは、予の甚だ遺憾とする所である。こは只西歐人文の思想史上に於て、特に現代の諸先哲より學び得たる思想的壓力の興味深き事實の理解を得ようとした努力の、甚だ不充充分なる産物に過ぎない。只若し今日予と同様の真理の問題に苦しむ人あらば、或は多少の裨補する所ともなるであらうか。予は心中忸怩たるものを覺えながら敢て斯かる一小稿に今此序を加へた。此論文は全體としては人生に於て抑も宗教信仰なるものに引導するの哲學的緒論と謂ふべきであらう。或は結論なるやも計り難い。吾人の意識の全體系に於て宗教的信仰なるものゝ占むべき必然的位置、或は意義を明かにするを力めたと謂ひ得るであらうか。我々は人格の最高の特權であり又義務である『生』の肯定——生の意義の肯定、従つて生の諸價値の肯定よりして究極しては宗教の本質的真理の實在界へ突き進まねばならぬであらう。人類文明の最高峯に立ち

最深底に流るゝものとして生の主權を掌握するものは、宗教であり、而て宗教が其の真理の基礎を求めて學問の形を成す時哲學となる、『學としての宗教』が哲學であるのである。人間の要求の最後のものは、遂に『真理に根據せる信仰』であらねばならぬ。今日の宗教哲學の任務は新古を囊括して種々なる難問に直面してゐる。歴史の意義の問題と云ひ、超越的形而上的實在の問題と云ひ、或は生と認識といふ問題の如き、或は宗教の本質と其の個性との關係の問題の如き實に其の例である。要するに決して容易な業ではない。然ながら困難の大なるだけに其報も亦小さくない事は期待すべきである。若し幸にして是の如き宗教形而上學が成功するならば、哲學は獨斷主義に陥らずして而も世界觀の學としての古來の光輝ある傳燈に副ひ得るであらう。哲學は宗教の且信仰の礎石として生と極めて親密なる關係を結び生に養はれつゝ生を富まし、生を支配しつゝ生に奉仕するであらう。宗教哲學の此の重任が日蓮聖人の信仰たる本佛の宗教に據つて始めて果されるといふのが予の確信である。今や東西文化の合一てふ事

は現代以後將來に於ける世界人文の必然的運命であり、而て更に全人類の救済され得る所以の根據も亦實に此處に由來するであらう。此の爲めには彼の西歐諸民族は先づ其の自負自高の心を去り、大なる襟度雅懷を以て我が東洋の精神文化に深き研鑽の勞を拂ひ、己れ自らが求めしめて未だ獲ざりし所のものを確乎として獲得し把握し納受信伏して如來の聖教に拜跪合掌せなければならぬと同時に、我等も亦かの泰西文化の種々特色ある功勳と魅力とに對しては、深き同情と理解とを有せねばならぬ。人間の根柢的和解は實に宗教に如くものはない。思想的に特に惠まれた佛教と西洋哲學との、此等東西兩文化主流を合流せしむる法華經的開顯統一の精神と業績とに依つて肥やされた地盤に、宗教の哲學的研究は彌々培はれ行き、かくて人類救済の聖業は始めて豊けき實りを遂げ得るであらう。

南無妙法蓮華經

(續)

## 落穂籠

上田辰卯

二人か、つて一人を運搬した駕籠は、一人で一人を輸送する人力車に壓倒された。その人力車は、一人で數人を運ぶ自働車の出現に逢つて、何時とはなしに影を消してしまつた。十數人の船頭が楫拍子揃へて漕いだ和船は、風の力を利用する帆船に亡ぼされ、その又帆船は蒸汽力をもつてスクラューを廻轉させる汽船に敵對することは出来なかつた。

最少の勞力をもつて最大の効果を挙げやうといふ近世の經濟學は、かくて人間の力を無限に擴大させて來た。機械の發達もその爲めだ。分業の發達も、そのおかげだ。國際貿易もそこから出發した。ただに産業のみと云はない。農業も、政治も、教育も、悉くがこの法則に原動力を置かないものはない。こうして建設されて來た今日の文化だ。

最少の勞力——最大の効果、それは實に人間社會の進歩發達に貢献したのみならず、人類の偉大なる活動の源泉となつて來たものであるが、その正しい

解釋が忘れられた時、却つて人々には恐ろしい誤解に陥つてしまつた。最近の險惡なる世相は、要するにその誤解が原因してゐるのではあるまいか。

勞せずして利得を得んとする、働かずして分配を期待する、資本主義者と言ひ、社會主義者と言ひ、各々その立場こそ違へ所詮は勞力少なくして分配のみを獲得せんとする餓鬼の鬭争に外ならない。かくて人類文化の建設に役立つた經濟學の原則は、近代人の誤れる解釋によつて却つて社會組織の破壊を招來せんとしてしまつた。

二人がかつて運搬したものを一人ですませやうといふ事は、決して他の一人が怠けてゐてもよいといふ意味ではない筈だ。幾何級數的の増殖率を持つ人類が、僅かに算術級數的の増殖しかない自然産物に對立して行かうとするには、どうしても勞働の効果を多からしめてそこに不斷の補充をしなければならぬ。中世以前に於けるやうな勞働力の冗費としてゐたのでは、到底今日のやうな夥しい人口は生存して

行かれない。即ち勞働を効果的ならしめることは、人類が自然に打ち勝つて行くための唯一の手段であるのだ。

二の勞力を一ですませるやうに工風するのは、二倍の効果を出すためであつて、一人が怠けるためでもなく、又二人共が半分の時間を働いて、あとを寝てゐたためでもない。徒歩時代に十里の道の往復に二日かかつたものを、自轉車を持つ今日僅かに半日で往復出来たとしても、それは残りの一日半を無駄に捨てるためであつてはならない。餘力を以つて外の仕事に役立つために働くべきだといふ事は、既に記述した通り、勞働力を効果的ならしめなくては、人類が自然力に征服されてしまふといふ事實で見ても極めて明らかだ。

人類繁榮の爲めの勞働効果説が、勞せずして分配を多からしめることを誤解したばかりに、社會が混亂して來たのは當然である。

知識の勞働とか、資本の力とかを禮讃して、筋肉

勞働に多くの價値を見出さないものが少なくない。私はそれを所謂固陋なる資本主義者の中に多く見出す。知識を否定し、資本の力を否定して、たゞ筋肉勞働のみが唯一の生産力である如くに誤解してゐるものも又少なくない。彼等は無論社會主義者の中に多い。

勞働が蓄積されて、それが如何なる形態を取つてゐるにもせよ、人間の勞働がなくては事物の運轉されないことが明瞭であるとするれば、前者の資本偏重の誤れることは云ふまでもない。勞働が尊い故にそれを効果あらしむべく、智的にも資本的にも補助して行かうといふのが經濟學の目的ではないか。

然らば後者のいふ如く筋肉勞働のみが尊いのか、これの誤りと愚かさは、さきに記述した人類の繁殖率と自然力とを考へただけでも明瞭であつて、敢へてこゝに改めて説く必要はない。

資本家が勞働の價値をはつきりと知るとき、又勞働者が資本の必要を會得するとき、正しい分配は行はれ、人類の文化は再び發展の徑路を辿るのだ。

× × ×  
農村救済の聲が盛んなとき、金融と物價との關係

が屢々論じられた。こんなことは少し調べれば誰にも解り切つたことなのだが、しかもそれが、たいいて正しい解釋が加えられてゐないのは不思議な位だ。

農村に借金がある。それは多く物價の高いときに出來た借金だから物價が下落した今日、以前の金額を支拂ふに及ばないといふのだ。甚しいのは、それを取らうといふのは不當利得だとさへ言つたのがあつた。成程借りた當時の五十圓は米が一石であつたが、返へす今日の五十圓では米が二石も三石も買へるとすれば、一見不合理のやうにも見える。然しそれは、借金を返へす時には借りた當時の二分の一にも三分の一にも當らない時代はなかつたか。遠い事ではない。歐洲戦争の當時、十五圓の米が三年経たずして六十圓になつた。千二百圓の生糸は四千五百圓迄行つた。前の筆法で云へば、借りた人は不當利得をやつた譯だ。

金利とか、物價とかいふ大きな問題を論議するとき、決してそんな目先の波瀾を一の論據としてはいけない。そこでこの問題の解決に先だつて、過去二、三十年間の重要商品の物價の統計と、金利加

算の數字を出してみやう。私がくどくどしく書き立てないでも、これを見た方が早い。

	綿糸	米	支那棉	金利
明治三十二年	九十四圓	八圓七十錢	十六錢	七分
同 四十三年	百五十六圓	十四圓三十錢	二十三錢	五分
大正 七年	三百十圓	三十八圓	五十七錢	
同 九年	六百七十五圓	五十二圓		
				一〇〇、—
				一九六、—
				一六三、—
				三七二、—
				二六〇、—

(大正九年の狂騰相場は一時的のもの故比較せず)

明治三十二年以前の物價統計は正確なものが得られないからこゝに掲載出来ないが、物價騰貴率は決してこれ以下でないことだけは斷言出来る。正確なる數字の得られる過去二十年間を見れば、綿糸が三倍、米が四倍強、棉が三倍半、然るに金利の方は七分にして三倍半、公定利率五分とすれば僅かに二倍半に過ぎない。これをもつて見れば、金を貸したものは利息を取つたやうで、事實に於ては無利息に幾何か損失をしてゐる譯である。

大正十年以降物價の騰貴はやみ、最近の二、三年は反つて下落をしてゐるが、然し爲替の半値以下の暴落で、圓價が下落したから對外價値はない譯で矢

張りその利益は相殺されてしまつてゐる。金利は斷へず物價を勞銀の昂騰によつて相殺され、この兩者は永遠に追駈けつことをしてゐることを知らずして、金融や物價を論ずるものが多いからやりきれない。

× × ×  
經濟界に身を處せずして經濟を論議するものが多くなつた。これ等は疊の上で水泳を説く如く、又、未だ田畑を見ずして農業を語るが如く無價値なることこれに過ぐるものはない。青年學徒間の社會主義理論、駈け出しの政治家、學者等の習える統制經濟や、公利經營などは、詮する處農上水練のたくひではないか。

るかを考へてみたい。

營利を棄て、産業の發展を望むことは、裸體で極寒を凌がうといふに等しく、一應は尤もと聞えることもあるか知れないが、現實に即しては價値なき戯論である。眞理は永遠に新しい、二宮尊徳は言つてゐる。

『人道は譬へば水車の如し。その形半分は水流に順ひ、半分は水流に逆ふて輪廻す。悉く水中に入れば廻らずして流れ、又悉く水を離れば廻ることあるべからず。それ世を離れ慾を捨てたるは、水車の水を離れたるが如し。又、教義を聞かず義務も知らず、私慾一偏に著するは、水車を悉く水中に沈めたる如し。共に社會の用をなさず。故に人道は中庸を尊む。水車の中庸は宜しき程に水中に入れて、半分は水に順ひ、半分は流れに逆ひて運轉滞らざるにあり。人の道も斯くの如く、天理に順ひて種を蒔き、天理に逆ふて草を取り、慾に隨つて家業を勵み。欲を制して義務を思ふべきなり。』

現實の上にしつかりと根ををろし、眞實の道に生き切つた人の言葉と、現實の相を知らず、空理に著して論議する人達の言葉と、如何に大きな隔りがあ

尊徳先生で思ひ出されるのは今の教育だ。經濟的危機だとか、農村瀕死だとかいふ際に、この贅澤極まる教育機關はどうしたといふ事だ。大學生一人に就き國庫の支出は、年に三千圓餘だそうではないか。農村ではその一人の大學生に十町歩の收穫を、毎年棒にふるんだそうではないか。そんなにして習得するものはないか。最早腐りかけて用をなさない古い學問、現實と飛び離れた社會思想、就職難、窮迫たゞそれ文ではないか。

今の青年は何故に死んだ學問にばかり執着して、生きた學問を疎んずるのであらう。生きた學問は埃臭い教室にはない。觸るれば斬れるやうな牙えぐくした教育は、他人の勞働を喰ひ潰してゐるやうな學生生活の中には求められないのだ。薪を負ふて且に天の道を考へ、夕べに人の道を學んだ金次郎は實にかう言つてゐる。

『眞の道は學ばずしておのづから知り、習はずし

て自ら覚え、書籍もなく記録もなく、師もなく、而して人々自得して忘れず、これぞ誠の道の本體なる(中略)かくの如く日々繰り返ししてしめざる、天地の經文に、誠の道は明らかなり。かゝる尊き天地の經文を外にして、書籍の上に道を求むる學者輩の論説は取らざるなり云々。」

かゝる眞實なる教え、身を以て明かにしたる道は顧みないで、この危急存亡の非常時に面して、金魚の糞のやうにゾロ／＼と校門をくぐつて、書籍の上のみ道を求むるとは何といふ時代錯誤だ。これを教えるべき先輩は何をしてゐるのだ。これを正さない政治家は何を見てゐるのだ。更にこれを自ら悟らない學生自身は抑々も何としたことだ。

## 恐怖政治下の印度

印度志士 ラス、ビハリ、ボース

(過ぐる大正四年、歲晚、突如英國政府の依頼に因り、亡命中の印度革命黨員、タケール、グプタ、兩志士に日本退去命令が發せられ、期間内に追放せられんか、英政府の手に失はれんは必定

印度に於ける獨立運動は、大英國政府によつて暴政政策が採用され、あらゆる方面に於て國民の自由を奪ひ、印度を暴力のみに依つて支配して居るにも拘らず、日々急速の進展を示して居る。印度の新聞紙は逮捕、家宅搜索、收監、殴打及び銃殺の報道で一杯である。本月一月以來現に八萬以上の印度人が牢獄に監禁されて居り、諸學校の校舍や、諸官廳が、獄舎に轉用され、普通の囚人は政治犯人の場所を作る爲に、彼等の期間の満了前に放免されて居る。父親達や、後見人達は、彼等の子供達や、被後見者達の犯罪の爲に、科料に處せられ投獄されて居る。國事犯の爲に捕へられた婦人達は、甚しき凌辱と屈辱を受けてゐる。英國警察がその夫達を逮捕し收監した後、罪なき婦人達の貞節を蹂躪した場合が数々である。男子の政治犯被告達は、獄舎や留置場に於ては最も無慈悲に残忍に取扱はれてゐる。印度に於ては今やまぎれ無き恐怖時代である。印度國民

此處に情義と國威と東亞更生の爲に起つた頭山滿齋等の活躍となり、愈過去期日の前夜危機一髪の間に身を隠すに至つた。彼の印度人追放問題は廣く世の知る處である。タケール氏はラス、ビハリ、ボース氏の事で、果敢な運動の爲め遂に故國印度を追はれ、英政府の壓迫と刺客に抗しつゝ、爾來十七年間日本に滞在し、亡命印度人中の第一人者として日印間の橋となり、失はれる母國の自由獲得に不撓の奮闘を續けらるゝ人。「信ずるべき最後の勝利てふ事は今世界が忘れて居る最大の秘密」と常に語られる氏の面影の裡に、佛陀降誕の國獨自の闘争精神を偲び得る。誠に印度の獨立運動は、人類始つて以來歴史未曾に見ざる處の特殊の驚感的方法、即ち燃焼する精神力が、強大なる武力を向ふに廻して敢然肉迫しつゝある偉大な信念運動であつて、換言すれば聖ガンヂイに率ひられた反英國(反英人)に非ず、英政府の不信に對する)非軍事、不服従運動は究極する處、敵をも愛する人類愛に徹した慈悲の實踐行動であつて、其處に私兵は祖師日蓮聖人の愛の折伏態度を見出し得ると共に、該運動の勝利は、やがて來るべき世界の秘鍵を握る新しき奇蹟の開闢である事を確信する。

私共佛教徒として、釋迦牟尼の生れ給ひし印度法華經推廣の地印度の懐しき現状を思ふ時、ひたぶるに其の健闘と成功を祈り、「新しき奇蹟」速かならん事を願望するに吝であつてはならぬと思ふ。

會「教」七卷二號、三號。「日蓮」二十二卷六號に獨立運動の史的概観が載せてあります故併せ讀まれん事を望みます。(實義章寄)

會議、及びマハトマ、ガンヂイ氏は、重き刺激の下に在つてすらも非暴力主義を守ることの絶対的必要を持つて強調して居り、國民會議派員はこの主義を忠實に墨守して居た。併し乍ら政府の明白なる暴壓と、殊に彼等の母親や姉妹達に對する凌辱は、彼等を一層憤激せしめて彼等の與ふ限り最善の方法に於て復讐する様になつた。武装解除と、能無き武力、印度民衆は公然戰爭に於て英國に挑戰する事が出来な

いが故に、彼等は不本意ながら小戦術を取るの止む無きに至つて居る。過古數ヶ月間に、數名の英國地方官吏と、印度人官吏が、印度人に依つて殺害された。而してカルカッタよりの次の三新聞速報が、今月(八月)の第一週間に於ける状況を描寫してゐる。  
「カルカッタ八月三日發、高まりつゝあるテロリストの謀叛の計畫は、地方住民より連發拳銃三挺、施條銃十挺と、多量の彈藥を盗んだ結果としてベンガルのランカブルに於て大部學生であ

るが千五百の青年の逮捕に依り破壊されたものと信じられて居る。武装した衛兵が銀行、警察署、郵便局、公立建築物の周囲に配置され、向用心の爲め其の周囲には電線が張られて居り、破壊が防禦の爲めに置かれてある」

『カルカッタ八月五日發、一印度青年（ベンガル人）は、カルカッタ日刊新聞「ステーツマン」主筆、アルフレッド、ヘンリー、ワットソン卿を狙撃したが弾丸が外れた。該青年は服毒し其の場に倒れた。（註、件のステーツマンは英國民の機關紙で極めて反印度派である）』

『カツカツタ八月五日發、輸血其の他の醫學的施術も、七月二十九日テロリストに狙撃されたベングル州タミラの警視長官、エドウィン、エリソン氏の生命を取り止める事は出来なかつた。エリソン氏は傳令に側近く隨行されて自轉車で歸宅の途次、一發の銃聲が鳴り響いた。氏は直

ちに下車して發砲に應じたが次の弾丸に打たれて倒れた』

新聞通信員に依つてテロリストなる語が用ひられてはゐるが、此等印度人は一死以て母國に殉する熱烈なる愛國者で、自國の自由奪還の爲に働いて居るのである。換言せば彼等は實に自由の兵士である。斯くて現印度の政治情勢は英國が全印度を一大牢獄と化し、其の中に印度人の過半數を投ずる事に依り、印度を支配し得るのみと云ふ切迫した危機に立ち至つたのである。……一七・八・末（終り）

### 社會と宗教

日暮光道

元來社會に對する宗教の關係は甚だ密接なものであつて、刻々に生長しつゝある社會の根底として必ず宗教が中心をなすべきであることは、それが人生々活の根底であるといふ事實に依つて斷ずることが

出来る。殊に世界大戰後の世の思潮は、人間生活の凡有方面に於て社會化運動に向つて進みつゝあるのであつて、宗教生活のみ獨り例外と言ふ譯にはゆかぬ。之に就て社會問題を取扱ふ上の一の危険は、その問題を徒らに形式化したり、或は唯物化したりして、その本來の動機を忘却してそれ自身の出發の價値を失ふことであらう。社會問題を取扱ふことに於て正しい方針を誤らずに、人間が文化生活の公道を歩む上に大切なことは精神化を真面目になして行く事だと思ふ。この意味に於て社會生活に對する教團の立場は、今後大いに注意を要すべきものであると考へられる。今宗教團體としてかくの如き精神化運動を起すには大體二様の方面がある様に思はれる。

第一、世の社會問題を扱ふ人達に向つて、その内の生活の態度を精神化することに努力すること。

第二、宗教家自身が、教團を中心として該問題の解決に直接たづさはること。

吾々は右兩方とも必要だと思ふが、現代の要求は特に後者にある（勿論本質的には第一に在ると信するが）もし是が企てられないならば、或意味に於て

教團そのものゝ存在が疑はるべきだと言はれても申譯はあるまい。現今社會問題の取扱はれてる範圍を通過すると、外く都市に集中するゝ傾きはないか、勿論社會の事情がしからしむる要求に迫られてゐる事もあらうが、一體にそれが都市に凝結されつゝある様である。少くとも都市に厚くして地方に薄い傾向は見受けられる。地方寺院の存在は、大いに此點に有意義なものではあるまいか。公私の社會事業が都市に施設されるに伴ひ、刺戟された寺院は、或程度の運動に着手しては居るが、その尨大な地域を有し何等爲すべきものゝないのを理由として、市外に立退きを強要するゝは、宗教團體が社會から見失はれつゝある悲しむべき一現象ではあるまいか。嘗て過去に於ては、山にあることが社會と密接な關係を保つことに不自由なるが爲市井の間に建立された寺院が、今や立去らしめられんとすることは、寺院生活者にとつて社會から突きつけられた一種の離縁状態だ。又吾人の大いに考慮に價することは、近代都市の社會的團結性の増大に反比例して、地方の分離性の強大になりつゝある點である。交通機關の發達は

經濟上にも影響して、地方の在來の相互扶助の美風を破壊し、一般に教育程度など低いために、都市に於けるよりも社會的に一致協同するといふ精神に、缺陷を生ずる様になつて來つゝありはしないか。この場合に當り地方寺院が、どの程度までこの方面に留意したかと問はれた時、明確な答はなし能はぬことではないか。

今日までこの種のことには教團が、同じ人類生活の行列の中に在り乍ら、留意の薄かつたことは否み得ないところだらう。公共のことを考へる現代は「個人」と言ふこと以外に「社會」と言ふことが寺院にもとり入れられねばならぬ、寺院の存在はその力を社會的理想の實現に注がねばならぬ、地方の經濟的・道德的狀態の向上、その他衛生等の事に至るまで寺院が中心になることに依つて、その使命が果さるゝのではなからうか。

老人達が徒らに老杉の下に死者の墓石を數へつゝ、生きた人達の蔭口を繰返すに過ぎなかつた寺院は、今や小供や青年達の喜ぶ青草の生ひ茂つた樂園に改められなければならない。そこに自ら生きんとする

宗教的要求も湧いてくるのではなからうか。宗教が國家に追従する時は、やがて宗教團體の存在には何等の權威もなくなつてくる。宗教の感化として、法律や倫理等に、偉大な効果のある事は言ふまでもないが、宗教そのものが法律倫理の世界の道具にされては、宗教自體の獨立的面目は全然破壊されて了ふ。或教團が社會的事業をなす、その社會事業そのものが彼等の争の遊戯的手段に弄せられる場合、その教團からは、物質的パンは豫期することは出来ても、精神的糧は求めることは出来ない。師走の巷に三脚の鍋が吊されてあるのを見る。

現今ヤカマシイ彼のマルクスとエンゲルスの言葉も、宗教家自身が伸び行く今日の社會に取り残されない様に、邁進すべく鞭うつたのであらう、彼も又逆縁として救はれるのであらう。將來寺院の發達、社會的事業は、若い元氣な宗教家と、青年男女の信者との協力的活動に期待すべき多くのものがあるとの話を聞かされる度に、心の躍動と責任の大なるを感ずる。

## 記事

### 本團月報

九月に入つて六日から連日の降雨に、會館の建築工事が若干手遅れの止むを得ざる仕儀に立到つた。

二三本丸太を打込んで、驟雨に支へられ、五本打込んで、屋根下にかけて込むといふ鹽梅で、九月の半ばには上棟出來るとの豫定も、遂に四五日の遅延を餘儀なくされた、随つて上棟の式典を舉行せんとするにも一は天候の加減と、二は場所の關係、三は工事の進捗上等から、前以て豫定する譯にも行かず、各方面への御案内をすることになれば猶更ら工事にそれ丈け支障を來たすべきを慮かり、斷然之を廢するに決して着々事業の進捗を計つた。漸く十八日には明日こそたとへ雨天でも上棟しやうと、今にも降りそうな空を見上げつゝ、周圍の柱建てを急いだ。

九月十九日は半月の長雨も奇蹟的にカラリと晴れ

て、天高き初秋の碧空を見、久し振りに日光に浴することを得た、怡然會館の前途を祝福するやうに感ぜられて、一同は雀躍しつゝ大きな棟木や、太い梁木が驚くべき人々の意氣と熟練せる技能とによつて、それからそれへと組み建てられて行く、二十數尺の高い足の震ふやうな危険な細い足場に、猿猴のやうに飛び廻つて掛聲も勇ましく、見る／＼うちに數十人の力の結晶で上棟され、最高の柱に南無妙法蓮華經の玄題旗が掲擧されたのは、早やおそがれの時であつた。幸に何等の事故もなく見事に豫定通り運んだことは偏へに、本佛の大慈大悲の御賜物と一段と深い感謝の裡に自ら合掌して居た。

工事を監視されて居た上田理事長は、とても二三人位ではと思はれる巨材を一人で易々と運び組み立て、行く會館の姿を眺めつゝ、「祝下が在せばモット大きなものが建つてしように……」との述懐に、聞く者思はずホロリッと一滴、噓。併しそれは果して如何であらうか、世間話にも「アノ人は遂に借金責めて命を縮めたさうな、僅か二三百の金なれば、あからさまに相談せば何とかなつたものを可愛さう

に……』と後では云ふ人も、若し生前に借して呉れと頼んでも、先づ九分九厘迄は断るであらう。

一代聖教の結集も、釋尊の非滅現滅に感激せる弟子檀那の淨業であつたのではなからうか。日生現下御生前には随分教恩に浴した人々もあつたらうし、同時に又相當の逆路子もあつたでしょう。『魔競はずば正法と知るべからず』法華の行者には三類の敵人はつきものである、今更これを免や角申すのではない。

時は非常時である、老首相が街頭に進出せねばならぬ程窮迫せる世相ではないか、國家興亡の岐路に立つ現狀に於て民心教化より最大肝要なるはない、民心教化は又宗教信念を培養することなくば効果は舉るまい、教化の正しき基準に據つて其大淨業に進まんとする夫れは誰れが中心とならうが、人に高下はあつても白法には差別はない筈、依法不依人と知りつゝも、彼は何だとか、黃嘴語るに足らぬものとして嫉視反目する如きありとせば、恐らく上は佛天に對し、恩師に對し、又妙經に對しても申譯あるまい、下は人心を教化するの素質を缺くものであ

るまいか。

微力にして論ずるに足らぬ者が、而も全力を傾けて奉仕せるを見れば、餘力ある者は法に於て、財に於て、身に於て各々分々の協力あるこそ道に忠なる所以ではあるまいか、日和見主義とか、孤立獨尊主義の如き、或は派に派を生じ、黨に黨を立つ如きは、宗祖の聖意に悖る者であるまいか、『異體同心』とか『皆歸妙法』とか『廣宣流布』とかは單なる字句ではないこと今頃改めていふ迄もない事である。幸に恩師の教恩に浴せる僧俗は、此際各自の僻見陋習を捨て、統一開顯の大義に則り堯齋としてこの國家の難關に協力精進しようではないか。若しそれ吾人に非あらば來つて堂々と正面より責めよ、『鐵は鍛え打てば劍となる』幸に正しければ共に俱に相倚り相援けて行かうではないか。疑ふ者は速かに來つて我等の行動を正視せよ、徒らに暗鬼は警むべきであらう。かくいふ間にも時日はドン／＼経過する、會館の校成は日一日と近づく。清き正信に燃え進んで善行にいそむべき樂しき淨念として活用あらまほしき日の到るを鶴首待望しつゝ、深い祈りを捧げる。

新團員 加盟

- |               |        |
|---------------|--------|
| 府下大井町鹿島谷二九四三  | 池田まさ子氏 |
| (榎本正氏紹介)      |        |
| 東京府下世田谷町經堂三三五 | 古澤たみ子氏 |
| (小林師紹介)       |        |
| 福島市大町五九       | 中村美津氏  |
| 同             | 中村與四郎氏 |
| 同市曾根田字後田二     | 金澤利江氏  |
| 同市陣場町二        | 日下治作氏  |
| 同市中町三五        | 原田清吉氏  |
| 同市曾根田字宮内四三    | 岩井霧氏   |
| 福島縣田村郡三春町馬場七四 | 渡邊トミ氏  |
| (岩井、中村氏紹介)    |        |
| 山口市上立小路水ノ上    | 野北祐次氏  |
| 山口縣萩市瓦町       | 石山堅氏   |
| (小高與吉氏紹介)     |        |
| 愛知縣寶飯郡三谷村     | 藤田清太郎氏 |
| (磯部氏紹介)       |        |

見聞録

三度新興佛教に就て

本年六月號の本欄に、妹尾氏の『新興佛教を聞く』

と題して小感を呈したことに端を發して、七月號の新興佛教誌上に妹尾氏は、それに對する所信を述べ、且つ卑見を徵せられた爲めに、再び八月號の本欄で氏の反省を促さねばならなくなつたが、今又九月號の新興佛教誌を寄せられたるを見るに、益々氏の御主張に愕かざるを得ない。かくては折角自分の微細な氏に對する苦衷も一顧の價すらなく、却て單なる論戰のやうに思はれて遺憾に覺ゆるから、これは緘黙を守るべきかとも思つたけれ共、それではあまりに失禮と考へて今一度最後の進言として簡単に申上げて置きます。

妹尾氏は、恩師の志を信すればこそ新興佛教運動に向はざるを得なくなつたと、蕃山先生の集義和書を引用されて居る。その文章はこゝに摘録は致しません、無論該文章は自分も同感であります。そうなければならぬでしやう。但し其依文判義に到つては氏の解釋と私等には多大なる相違を覺えます、定めし蕃山先生はその邊で微笑されて居ることと思ひます。恐らく第三者が色眼鏡なしに正直に該章句を見る時に『大道の實義』に於て現在の妹尾氏が、思



師本多上人の實義を忠實に奉じて居られると見ますか。

妹尾氏は「先師存生の時變ぜざるものは志ばかりにして、學術は日々月々に進みて一所に固滞せないう」からとして、日蓮主義や妙法蓮華經を捨て、新興佛教に來たことを必ず、恩師も喜ばれるであらうと考へられてゐる處に、私等は大きな見解の相違を來たしてゐます。變ぜざる管の氏の基本人格が移るも移る大變動を示して居ることにお心付かれぬか、それを自分は最初から度々進言してゐるのです。體道たる實義と用道たる學問とを混同された結果、私共は日蓮宗門の羈絆から脱せないもの、固陋なもの、時代遅れと蔑視された、従つて恩師も時を知らざる者、祖師も將來を達觀せざる凡人と輕侮された譏りは免れ難いでしやう。増上慢と評したことを氣にして、これでも日蓮教學に於ては「先年本尊論批判」に對して、恩師から過分の讃辭を頂いた者であるから少しは氣を付けろと今回御不滿をお漏しであつたが、どうもお叱りを受けて恐縮に存じます、幸にさうでなければこれ程有り難い事はない、謹みてお説

申し上げます。

そこでお考へ願ひたいのは、あのお手紙にもある通り、恩師の歎美は「本尊論批判」に對してであつて、妹尾義郎氏個人に對する全的の允可ではありませぬまい。世間にもこんな實例はあつて昨日は孝子として表彰された者が、今日は泥棒して警官に捕まつたやうに、妹尾氏が僅かの間によくも心境の變化したものだといふ事實をどうするので、自分の屋根は自分の家中にゐては見えぬ、一歩外へ踏み出して眺めて下さい。明鏡にお心を浮べて下さい。

私共が今でも法華經を最第一と尊信することに就て、妹尾氏は法華經最第一が天台の五時判で價值付けられてゐるとか、大乘非佛説で動搖するとか、佛誕の年代に數百年の差があるぞとかで、今日は日蓮聖人の主張された法華經主義や、日蓮教學は時代遅れとなつたとか、又信仰は學問と違ふと遁避の辯を弄するだらう等と論ぜられてゐるが、それこそ全く時を知らず、機を察せず、教を見ざる淺薄の御想像でありますまいか。法華經が現在でも、又將來に對しても嚴として最高の教理を保有せることは、夫等が

どうあらうと微塵も動搖も受けなければ、根柢もグラ付きませぬ、恰も大空に照る太陽の如く、倍々燦然たる光輝を放つて全人類の大燈明となつてゐます。世界の思潮が法華經化して來たことにお氣付かれませぬか。

恩師の著書の一頁でも眞に御覽になればこんな論議は無用です。マルクスの頭で法華經を讀んだり、無神無靈魂の目で法華經を見たり、無我論、闘争精神で法華經を手にしても、よい處は顯はれませぬまい。信仰と學問と違ふといふやうなことで多くの宗教家が最大の桶として居りませうけれども、それは私共には御心配御無用であります。法華經は最高の宗教であり、最高の哲學であり、最高の道德であることを改めて妹尾氏に申し上げねばならぬことを嘆きま

す。モットお互に眞剣に研鑽しやうではありませぬかと前回にも二度ばかり申して置いたのはそこです。今頃國際主義だとか、社會正義だと叫び廻ることが眞佛教徒の採るべき態度でしやうか、恩師のお志が那邊にあつたか、日蓮聖人が現代御出現になれば何をなされるかを知らずして日蓮教學を解せりどされつゝ、行動さるゝことが一層罪深いことを悲しむ傷むのです。

眞に妹尾氏にして恩師の志を信するとならば、師の志を變ぜずとならば、どうか恩師の墓前に清き朝一大懺悔あつて可然と思ひます。以下の餘儀は細論の要を認めませぬ。合掌 南無妙法蓮華經(磯部生)

## 編輯室より

彌々讀書に信仰に散策に何をすることも最もよい中秋となつて、各位の益々御健勝をお歡び申し上げます。

本月號には、恩師の「法華經の信解」續講

の外に、井上男から時局を憂慮された「電光

一心の秋」と題する玉稿を頂きました。河合

氏の「歴史の肯定と超歴史の立場」は一見六

かしいやうに思はれませうが、其の内容は氏

の入信経路が、深い立場から論及されてゐま

すから、特に學生や青年諸君の御熟讀をお願

め致します。

上田氏の前々號からの「今後の經濟はどう

したらよいらうか」の結論を載せる答であ

りました。少し感ずる所もあつて今回は

「落穂」を題する柔かいものをお願ひしま

した。一寸申添えておくことは該末文に誤解

なきやう、それは文上に捉はるゝことなくして其の根本精神たる信念を忘れんとし、其の精神を把んで頂きたいのです、所謂天地の經文とは孝經に示す「孝は天の經なり地の義なり」で、一步深むれば法華の精神であり、又無師、無學とは修養の完成せる人格者、換言せば最早學ぶべき何者もないといふ程度を無學といふのです、畢竟空論を排し、ふ程度を無學といふのです、畢竟空論を排し、て止眼断限の努力を高調したものなのであり、世間には尊徳翁の經世方面にのみ着眼、際的書翰を送つた事を九月十二日ロンドン特

電は報じてゐる。英國では廿日午後一時形式上ガンヂー氏を釋放したことになるが、事實上は未だエラウダ刑務所に止まつてゐる、而して可なり衰弱を來たしてゐるやうである。日暮氏の「社會と宗教」は青年の叫びとして味つて頂きたい。質疑應答は記事編輯の爲め來月號に割愛致します。

寄附團費誌料領收 (自八月二十一日 至九月二十日)

一金五拾錢也	秋田縣 城 忠 克殿	一金壹圓貳拾錢也	東 京 猪又金太郎殿
一金八圓拾九錢也	岡山縣 山岡 俊 領殿	一金參圓也	岡 崎 寺澤萬三殿
一金壹圓貳拾錢也	大 阪 樋口繁次郎殿	一金壹圓也	大 阪 清水政義殿
一金壹圓貳拾錢也	福岡縣 秋山照代殿	一金壹圓貳拾錢也	同 石 山 豐殿
一金七圓也	北海道 木原文靜殿	一金貳圓貳拾錢也	山梨縣 大野日通殿
一金貳圓貳拾錢也	東 京 榎本 正殿	一金參圓也	富山縣 野上三次郎殿
一金壹圓貳拾錢也	同 池田まさ子殿	一金貳圓五拾錢也	豊 橋 服部源助殿
一金壹圓貳拾錢也	同 星野純義殿	一金貳圓貳拾錢也	山口縣 野北祐次殿
一金貳圓貳拾錢也	同 本郷常次郎殿	一金貳圓貳拾錢也	福井縣 本 承 寺殿
一金壹圓貳拾錢也	千葉縣 倉 並 隆殿	一金貳圓貳拾錢也	千葉縣 風戸三藏殿
一金貳圓四拾錢也	京 都 久城勝三郎殿	一金貳圓貳拾錢也	愛知縣 山本金太殿
		一金貳圓貳拾錢也	福 島 中村美津殿
		一金貳圓貳拾錢也	同 中村典四郎殿
		一金貳圓貳拾錢也	同 金澤利江殿

一金貳圓貳拾錢也	福 島 日下 治 作殿
一金貳圓貳拾錢也	同 原 田 清 吉殿
一金貳圓貳拾錢也	同 岩 井 亮殿
一金貳圓貳拾錢也	同 渡邊トミ殿
一金貳圓貳拾錢也	東 京 栗原敬三殿
一金壹圓貳拾錢也	茨 木 石 山 聖殿
一金貳圓貳拾錢也	京 都 府 大槻秀三郎殿
一金貳圓貳拾錢也	愛知縣 藤田清太郎殿
一金參圓也	東 京 酒井 藤 吉殿
一金參圓五拾錢也	同 菊地 雄 三殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉縣 山田甚之丞殿

一、集金郵便は参圓以上で其取立には團費誌料の上に金拾錢の集金料を添加致しますが、御都合で御一報下さらば手續致します。

一、御轉居の節は必ず新と舊の兩住所を御通知下さい。

一、十月一日から大東京となりましたから従來市外であつた方々には、御手数ですが至急に改正區町名御一報願ひます。

財團法人統一團會計

御 注 意

一、團費、誌料は總て前金に願ひます

一、爲法、爲國、爲人に御清養を願くのですから、お互は可成元費を省きたいものです。若し纏めて御持込み難い場合はたとへ一冊分宛郵便代用でも宜しい、更に時々御静動をお知らせ願ひます。

新刊 國體本源論

定價金三十五錢 郵 税 不 要

松尾 清明 著

(御注文の簡掲載の雑誌名記入を乞ふ)

自己の愛住せる大地の體格を克明に認識せすんば他の何事をも誤解するに至るべし。日本人たるもの先以て日本の國體を正解するを要す。此意味に於て本書をすしむ。

千葉縣長生郡二宮本郷村

東 天 社 振替口座東京三三五三三番

本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖語錄 改版

特價 全壹圓八拾錢  
送料共

一日蓮主義本領

全 金貳圓拾錢

一法華經要義

全 金貳圓五拾錢

一日蓮主義心髓

全 金壹圓五拾錢

一日蓮主義精要

全 金貳圓九拾錢

磯部滿事謹輯

一本多日生上人

特價 全壹圓七拾錢  
送料共

申込所

東京市品川區南品川四一二

財團法人統一團  
振替東京九四二〇番

一月「教」誌

定價一冊 金拾錢  
送料共 金五厘  
一ヶ年前金 金壹圓貳拾錢

申込所

東京市品川區南品川妙國寺境内

「教」發行所  
振替東京一〇九四〇番

價定一統	
一冊	金貳拾錢
半ヶ年	金壹圓貳拾錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共
前金之	前金之

料告廣一統	
表紙一頁	金貳拾錢
一頁	金拾五錢
半頁	金九錢
四分一頁	金五錢
前金之	前金之

昭和七年九月廿四日印刷納本 (第四百五十一號)  
昭和七年十月一日發行

不許複製

編輯兼 磯部滿事  
發行人 鈴木日雄  
印刷所 東京府在厚野品川町南品川百八十一番地  
電話高輪六〇二四番

發行所

東京府在厚野品川町南品川四百十二番地  
振替東京九四二〇番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

理想文化の建設

聖訓摘要……………日生上人

國難と立正大師……………小林一朗

阿含の根柢を探りて(其四)……………中村清一

落穂籠……………上田辰卯

街頭布教に参加して……………本郷常次郎

逝ける母を慕ひて……………まじ

記事

○本團月報 ○質疑應答 ○教報 ○寄附團費誌料領收

第三十七年十一月號

統



財團法人統一團發行